

対人関係と視界に関する事例研究（Ⅰ）

——対人関係用語の使い分けについて——

吉 田 正

A Case Study of Interpersonal Relationship and Personal Perspective

Tadashi YOSHIDA

1

社会化の概念は、個人と社会の関係を如何に捉えるかと云う理論社会学の根本問題に基礎づけられねばならない。従来この概念は、社会が自己を再生産するに必要な一般的行動様式を諸個人に内在化させ、彼らを社会生活に適応させる働きであると理解される傾向が強かった。この概念がこのような人間を被形成的存在と見なすに至った理由には、社会の秩序は如何にして維持され得るかと云う理論社会学の問題から派生した概念であったことが一因として挙げられるだろう。個人は集団の結合意味の方向に狭隘化されて成員となるが、複数の集団に所属する個人は如何にしてそれらの成員性を統合し得るのであろうか。社会化概念は、社会の全体性の維持機能と引替えに個人主体の全体性を犠牲にしたと云える。ここに社会的個人の主体性は如何にして可能かと云う問題が生ずる。そしてこの問題に対して従来のネガティブな社会化論は無力である。

柴野昌山氏は最近「社会化論の再検討——主体性形成過程の考察——」と題する論文に於て、主意主義的観点からポジティブな社会化論を提唱した。彼は社会化概念の系譜をネガティブなもの¹⁾とポジティブなものに分けて考察し、次のように対比している。前者の社会化概念は、1) 成員性の習得であること、2) 基本的に学習であること、3) 相互作用を通してパーソナリティを社会体系に結びつける過程であること、4) 社会体系の機能的要件であること、を意味する²⁾。後者はそれを、1) 交渉性 (sociability)、2) 個性、3) 自律性、の諸性能の総体として考えられる能力の獲得と規定する³⁾。前者が「社会性 (sociality)」の社会文化的形成を主張するのに対して、後者はそれを利用して自己実現する能力性 (competence) の獲得に社会化の方向を求めるものである。後者は、「個人が圧倒的な社会化作用を受けとめ、自己の力において個性的に組織化することによって、それを自律的に克服していく対抗的能力⁴⁾」であり、自律的社会化

能力と呼ぶことができる。それは、「直接的で緊張を孕んだ対人関係における他者との交渉 negotiation (bargaining ではない) における体験を通してこそ獲得される⁵⁾」ものである。したがって自律的社会化能力の主要な構成要因は、対人的交渉能力と云える。対人的交渉能力は、「自己の環境的世界に対する主観的意味づけとの関連において、当該状況にふさわしい反応様式を選択し、適切な対人関係を促進する能力 (interpersonal competence)⁶⁾」と規定される。いわゆる主体性と呼ばれるものは、「自律的社会化能力を獲得した人格の性能⁷⁾」と云い換えることができる。

以上の柴野氏の論点は、この調査報告に重要な意味づけを与えるものである。社会化の課題が対人的交渉能力の形成に求められるとき、それは如何なる仕方でも可能になるのであろうか。対人交渉の現場は、本来実存的な出会いに基づく不可測性に支配されつつ、自己実現を可能にする状況の創出に役立つ諸技法、諸能力が動員される場である。したがって対人交渉能力を広義に解すれば、交渉技能ばかりでなく、他者の気分や関心を的確に察知する感受性や無意識に表出される視線の動き、姿勢、しぐさ、表情などの身体技法、対話の技法、その他対人交渉を有利に導きうるもののすべてを含みうる概念であると思われる。社会関係はすべて何らかの交渉性の意味を有するから、この能力の多面性は、日常生活の全体に於て陶冶されるものであると云えるが、教育の場に於ては、それが自覚的に行われねばならない。しかしこの能力を養うための組織的なカリキュラムはいまだない。この調査報告は、そのカリキュラム化をめざして、先ず学生が日常生活に於て所有する人間関係の全体を、どのような枠組で人格的に統合し、どのような法則に従って対人関係用語を使い分けしているかを明らかにしようとするものである。

2

社会化論の系譜を、柴野氏は前掲論文に於てネガティブなものとポジティブなものに分けて考察し、前者は後者に発展的に組み込まねばならないと主張している。ここでネガティブと云われ、ポジティブと云われる意味は、個人の主体的形成の立場に立つかぎりでのことであり、社会の秩序維持の立場に立てば、その意味が逆転することは云うまでもない。社会と個人の相互形成の関係を原理的に最もよく説明した理論は、リットの「我と汝の視界の相互性」の概念であるとする。

この見解によれば、社会と個人の本質関係は次のようになる。視界の相互関係にある我は汝を含む世界と根源的に融合して、汝を自我の構造契機とするとともに、自我と同じ視界の構造を有する汝の構造契機として統合され、それに克服される体験をもつ。ここに我と汝の視界は、含み一含まれると云う矛盾を内包することに於て交叉し、我および汝はそれぞれの位置より自らをその弁証法的統合の契機とする客観的な全体的連関を措定するのである。換言すれば、個

人は個有の体験中心から世界の諸契機を弁証法的に統合する構造的全体であり、社会は個々の自我中心に浸透して諸自我より弁証法的に統合される構造的全体である。社会と個人は相互に内在し、社会は個人に於て社会であり、個人は社会に於て個人であると云えるのである。したがって個々の人格の中心の外に社会的中心を措定する必要はないのである。⁸⁾

社会と個人の本質的關係が、視界の相互性として捉えられるならば、社会化は決して諸個人を一方向的に類型化するものではなく、諸人格はそれを体験的全体の一契機として個性的に受けとめなおす側面が同時に意味されねばならない。他我の働きかけを契機として、自我は新たな弁証法的統一体としての人格となることを得、人格の構造的変化は、それを構造契機とする社会の全体的変容のチャンスともなり得ることが同時に意味されねばならない。⁹⁾

バーガーとルックマンは、共著「日常生活の構成 (The Social Construction of Reality)」に於て社会化の構造を論じ、それを三つの作用の弁証法的連関として捉えようとしている。すなわちそれは、外化 (externalization)、対象化 (objectivation)、内在化 (internalization) の作用を弁証法的契機とするものである。¹⁰⁾ それぞれの契機は、次のように特徴づけられる社会的世界の本質的側面に対応する。「社会は人間の産物である。社会は客観的な現実である。人間は社会の産物である。」¹¹⁾ が、夫れである。

筆者は、この構造図式には、もう一つの構造契機が欠けていると考える。「対象化された社会的世界は、内在化によって意識の中へ投げかえられる」¹²⁾ と説明される内在化は、投げかえられたものが、個人に於て如何に造り変えられるかを問題にするものではない。それは従来社会化作用と呼ばれてきたものと同様に、社会の側からの働きかけのみを意味するものである。したがってこの図式では、それぞれの個人主体が、内在化作用を如何に個性的に受けとめ、どのような形態に人格を組織化するかについては問題にし得ない。そしてまたその人格的に統合された形態のいかんによって、どのように外化作用が規定されるかについても問題にし得ない。この調査報告では、内在化過程と外化過程を媒介する過程として形態化の過程を考えて、これらの問題を取り扱うことを企図した。

形態化 (Gestaltung) の概念については、O.F. ボルノーの研究がある。¹³⁾ 彼は Gestaltung (形態化、構成) の概念を明らかにするために、Bildung (形成、教養) と Formung (形づくり) との比較を試みている。Bildung は創造者がその力によって無から形成物を造り出すことを意味するのに対して、Gestaltung は何らかの形あるものに別の形を与えることを意味する。Formung は任意の形を与え得る素材に外から形式を強制して形づくるのに対して、Gestaltung は既に形づくられたものを、それに残された形成可能性に従って補足的に形づくり直すことを意味する。すなわち形態化の過程は、既に形態化されたものに、より完全な形態を与える過程である。

筆者は社会化の構造を、バーガーとルックマンの構造図式に形態化の概念を加えて、形態化

→外化→対象化→内在化の四過程の相互規定関係として捉えたい。この四過程のうち形態化→外化の過程は、主として個人主体の働きに、また対象化→内在化の過程は他者との相互主観的な働きに依存するものである。これらの過程は別個のものではなく、対象化されたものの内在化によって形態化が規定され、形態化されたものの外化によって対象化が規定されるものである。

社会と個人の関係は、抽象的には相互内在関係として捉えられるが、これを具体的に捉える手段としては、社会から個人を捉える観点と個人から社会を捉える観点を統合する方法が考えられる。T.ガイガーは、社会と個人の相互連関を考察する方法として、二つの視点から構成される像を統合して、全体像を捉えようとした。一つは、カタスコピッシュ像であり、これは集団の立場から、云わば上から見られた集団の全体的組織の像である。一つは、アナスコピッシュ像¹⁴⁾であり、これは個人の立場から、云わば下から見られた個々人の生活領域の像である。

これらの視点をを用いて社会化論を整理するならば、1) 二つの像が相補的關係として統合的に捉えられるときには、カタスコピッシュ像を構成する視点は、対象化されたものの内在化過程に対応し、アナスコピッシュ像を構成する観点は形態化されたものの外化過程に対応するものと云える。2) カタスコピッシュ像を構成する視点からのみ社会化を捉えるならば、人間の被形成的側面が強張されてネガティブな社会化論となる。カタスコピッシュ像は、例えば客観的図式としての社会 (die Gesellschaft als rein objektives Schema)¹⁵⁾、地位一役割体系などとして捉えられたものを意味するから、ここでは個人は一定の役割を果す成員となることが期待され、社会化は個人を完全な成員としての、ホモ・ソシオロジクスに仕立てあげてをめざさざるを得なくなる。3) アナスコピッシュ像を構成する視点は、複数の集団や関係に所属して、多面的な社会化の流れを受けとめる人格が捉えられる。例えば、超自我、マージナル・マン、アノミーなどの概念は、社会化の流れを受けとめる主体の側の様相を捉えたものである。アナスコピッシュ像からのみでは、社会に対して抑圧される、あるいは逸脱する自我が強張される傾向がある。

ガイガーは、カタスコピッシュ像から来る一つの命題、すなわち大衆社会における個人は原子化された大衆存在となると云う命題を、自己の対人関係とコミュニケーションの種類と時間使用量を数ヶ月にわたって記録分析し、それによって構成されたアナスコピッシュ像を以てくつがえそうとした。すなわち大組織の中で多くの匿名的接触が生じたとしても、個人の日常生活に於ては匿名的な関係よりも親密な関係の方が支配的であると云う結論である。¹⁶⁾

ガイガーは、ここでカタスコピッシュ像を客観的図式として、アナスコピッシュ像を主観的体験として、両者を対比的に取り扱っており、いまだ二つの像の統合された全体像の形成にはいたっていない。

バーガーとルックマンは、前掲書に於て社会的現実の構造を、「客観的現実としての社会

(society as objective reality)」と「主観的現実としての社会 (society as subjective reality)」との相互連関として取り扱っている。¹⁷⁾この場合の客観的現実とは、意識を離れて存在する現実を意味するのではなく、他者との相互主観的意識によって構成された世界を意味するものである。また主観的現実とは、単に主観的であるのではなく、相互主観的に対象化された意味を内在化して個人の側から構成しなおされた世界である。両者は相互浸透して、前者は個人の外化作用によって修正される可能性があり、後者は社会の内在化作用によって変更される可能性がある。ここに於ては、カタスコピッシュ像とアナスコピッシュ像が相互内在と云う仕方でも統一的に把握されていると云えよう。

我々は、それぞれが視界中心として主観的世界を構成すると同時に、相互主観的な社会的文化的世界を構成する存在である。このことは、視界の相互性の概念からただちに演繹できることである。社会と個人のこのような構造に基礎を置いて社会化の概念を構想するならば、先に掲げた四過程、すなわち形態化→外化→対象化→内在化の弁証法的関連として捉えるのが妥当であると考えるのである。

3

社会的現実の構造を客観的現実と主観的現実に分けて考察するバーガーとルックマンの説は、A.シュッツの理論に基礎を置くものである。ここでこの調査に必要なかぎりでは、シュッツの空間に関する理論に言及しておく。¹⁸⁾シュッツによれば、生活世界は主体の身体を中心に同心円的に、「実際に到達できる領域 (the world within my actual reach)」と「潜在的に到達できる領域 (the world within my potential reach)」の層に配列され、後者は更に「回復可能な領域 (restorable reach)」と「達成可能な領域 (attainable reach)」に分かれる。「実際に到達できる領域」は身体的諸機能を使って操作できる範囲である。「回復可能な領域」は、我がかつて「実際に到達できた領域」のうちで再び現実化できる可能性が保持されている範囲である。「達成可能な領域」は、未だ直接に経験したことはないが、欲しさえすれば現実化しうるであろう範囲である。

シュッツはまた、この生活世界の空間配列に対応して社会的配列を考えている。それは他者に対する経験が直接的か非直接的かによって、親しい仲間 (consociate) と同時代人 (contemporaries) に区分される。同時代人は、私と同じ時代に生きて現在の現実を共有している人々である。親しい仲間は、同時代人の中で face-to-face の関係を共有している人である。

彼は、対面的状況のもとで仲間を捉える意識の志向性を汝志向 (thou-orientation)、現在直接に経験されない同時代人を捉える夫れを彼等志向 (they-orientation) と呼んだ。我々は汝志向によって他我の意識生活を生き生きとした現在に於て直接に把握するが、彼等志向によっては何らかの典型化 (typification) して把握する。汝志向が相互的となる face-to-face の状況を親しい仲間 (consociate) との「われわれ関係 (we-relation)」と名づけ、これを先の「実際に到達でき

る領域」に対応するものとする。そして同時代人は、同様に「回復可能な領域」と「達成可能な領域」に対応して、「回復可能なわれわれ関係」と「達成可能なわれわれ関係」に区分せられる。この区分は典型化にともなう匿名性の度合に応じて更に諸段階に区分せられる。

「回復可能なわれわれ関係」は、かつて「われわれ関係」を共にした仲間のうちで、再び生きた「われわれ関係」を実現しうる可能性を有する同時代人との関係である。その事例として、現在に至るまで幾度も出会って来ており、今後も規則的に顔を合わすことが期待される仲間があげられる。このような仲間に対しては、「われわれ関係」と同時代人に対する関係とが継起することになる。どんなに親密な友人も、同時代人としての関係に於ては何らかの典型化され、匿名的な類型図式で捉えられるが、対面的状況のもとで出会うときには彼の意識生活の生き生きとした表出行為によって、類型図式はたえず修正され、あるいは打ち壊されて個性化される。対面的状況は類型化された関係図式が個人の主観性に干渉されて弾力的に変更される場である。

以上のシュッツの理論は、この調査の外郭としてその理論的位置づけを提供してくれると思われる。この調査は、追手門学院大学の学生30名（男15名、女15名）にその所有する「回復可能なわれわれ関係 (the restorable we-relation)」にある人々（総計5,609名）を親疎の遠近法的序列に配列してもらい、その配列を可能にし、またそれを支配する枠組がどのようなものであるか、そしてそれが実際の対面的状況に於ける行動の諸法則とどのような規定関係にあるかを明らかにしようとしたものである。調査報告(Ⅰ)では、対人関係用語の使い分けに表現される心的距離 (communicative distance) によって、調査報告(Ⅱ)では、対人交渉過程で相手の行動を喚起するために使い分けられる訴えかけの云いまわしに表現される心的距離によって、その課題にアプローチした。前者は昭和50年に実施した調査であり、後者は昭和52年に同じ被調査者に対して実施した追跡調査である。追跡調査は、二年後の対人関係の変化やその間のコミュニケーションの頻度など、時間の問題にアプローチする試みである。

4

対面的状況は、相互主観的な意味形象が構成され、その規制力が個人に生き生きと体験される場であるとともに、個々人の主観的な意味づけと働きかけによって、それがつくり変えられる場でもある。集団が対面関係に基礎づけられることは、集団の地位——役割体系から演繹することのできない、個人の生活史からくる不可測性を根絶し得ないことを意味する。face-to-face の状況は根本的に交渉の場であり、対人交渉能力はここに於て形成され得るのである。

我々は対面的状況に於て他者との間に一定の位置、方向、距離を取り、状況の変化とともに普通無意識にそれらを使いわけている。E.ホールはこの距離の使い分けに法則を見出して、人間をとりまく空間を四つの距離帯 (zone) に分けている¹⁹⁾。各距離帯は、視覚聴覚嗅覚などの身

体的諸機能の作用形態の相異に基礎づけられるとともに、それぞれに対応する文化的行動様式に規定されて構成される。したがって、文化圏が異なれば同じ行動様式が異なる距離帯を要求し、同一文化圏に於ては距離に適合した行動様式が取られなければコミュニケーションを円滑に運ぶことが困難になる。

ホールは四つの距離帯を、1) 密接距離 (Intimate Distance), 2) 個体距離 (Personal D.), 3) 社会距離 (Social D.), 4) 公衆距離 (Public D.) と名づけ、更にそれぞれを近接相と遠方相に分けて八つの距離帯について実際に観察し、その幅を測定している。調査対象はアメリカ合衆国北東部沿岸生れの人々の中から中間層の健康な成人が選ばれた。その結果得られた各距離の特徴のみを、ここで記しておく。

密接距離は、身体を中心にして手を伸ばして相手の身体に触れることのできる範囲である。この範囲では、コミュニケーションの手段として言葉よりも皮膚や筋肉が多く用いられ（近接相）、発声がいられるときにも極めて低いレベルに保たれる（遠方相）。これは愛撫、格闘、慰め、保護の距離である。個体距離は、互いに腕を伸ばして指が触れ合う範囲であり、身体的支配の限界を意味する。この距離帯は個人的な関心事を語りあうのに適している。社会距離は、相手の全身像を立体的に捉えることのできる距離で、約1メートル半から3メートル半までの範囲である。これは個人的でない用件や業務、社交上の対話などに用いられる距離である。その近接相に人がやってくると会話にひき入れられてしまい、この距離に立って見下ろされると威圧感を受ける。その遠方相に人が居る場合には、その面前で自分の仕事をつづけても失礼にみえない。公衆距離は近接相が約3メートル半から7メートル半、遠方相がそれを越える範囲である。この距離でコミュニケーションが行われるときには、あらかじめ文章の語句が選ばれ、²⁰⁾ 文体が構成され、声のテンポは落ち、ことばはよりはっきりと発音される。

以上が四つの距離帯に関する説明の要点である。ホールは、日常生活に於て無意識に操作されるこれらの距離帯を「かくれた次元 (The Hidden Dimension)」と呼び、それが生活様式に顕現する多くの事例を観察した。この観察の問題点は、各距離帯の測定された物理的距離が該当するのは平面空間に直立して対面する場合のみであることが明示されていない点であると考えられる。日常生活に於て実験室に似た平面空間で他者と対面することは、むしろ例外的なケースである。我々はテーブルの幅ほどの距離で対面して、四つの距離に対応する距離感を保つことができる。また移動によって物理的距離は変わっても距離感是不変の場合がある。日常生活は、道具の配置、装置、言葉づかい、身体技法などを使い分けることによって、物理的距離を一定にして心的距離を多様に保つ工夫の体系と云えるのではなからうか。

F. パンは「日本人の心的距離——その言語表現の仕方について——」に於て、ホールは空間的距離の（言語）行為への拘束について述べたが、それ以上には言語との関連について論じなかったとし、日本人の言語表現の仕方にどのような心的距離が表現されるかを簡単に述べてい

²¹⁾ る。ここで彼はホールとは別に Communicative Distance と云う概念を提唱し、みずから「心的距離」と翻訳している。心的距離は人間と人間が Communication を行っている最中に起るものであるが、Communication が行われていない時にはそこに期待される心的距離が Social Norm の一部分として「保存」とされる。このような考えに基づいて、彼は日本語の代名詞と名前の呼び方の Variations がどのように心的距離表現の Device として使われるかに言及している。

この論文の問題点は、1) 若干の事例を挙げて、その距離感の相違を指摘するにとどまっていること、2) Communicative Distance の概念が、ホールの空間的距離の概念とどのような関連にあるかを明らかにしていない点にある。後の点に関して筆者は次のように考える。ホールの距離概念は、対人関係に於て生ずる心的距離 (Communicative Distance) の距離感のちがいを平面空間に投影したときの諸形態である。心的距離が平面空間に投影されるときには同心円状に配列されるが、立体的な装置を用いるときにはそのかぎりではなくなる。それはまた、F. パンが試みたように言語表現の型にも表現される。その他、まなざし、しぐさ、姿勢、衣服など対人行動にかかわるもののほとんどが、心的距離の表現とみなし得る側面をもつと云える。

このようにホールの距離概念は、心的距離の一つの投影形態として理解すべきであると考えられる。それは同質的な平面空間に投影されているが故に、同心円状の形態で現われるにすぎない。しかしこの形態は、次の意味で重要な役割を果たすことができると思う。もしこの形態と他の諸事物に投影された場合の諸形態との対応関係を見出すことができるならば、この形態は、心的距離の諸表現形態を測る“ものさし”になるばかりでなく、心的距離を基準として対人的諸行動を整理し体系化する基本的枠組ともなり得るのである。そしてこれが達成されるならば、対人的交渉能力を養うためのカリキュラムに基本的な内容を提供することになると考える。問題は、如何にすればそれらの間に対応関係が見出され得るかである。この問題解決のために考案した方法を次に述べる。

5

この問題の解決法は、対人関係を媒介項として距離帯と心的距離の諸表現型とを対応させる方法である。この方法は、第一段階として個人の所有する対人関係者を同心円状に配列してホールの距離帯に対応させ、第二段階としてこれらの人々に対する諸行動を距離帯の表現とみなして、それを距離帯に対応させるものである。

初めに第一段階のプリテストで起った失敗の事例を紹介しておく。このテストは、ホールの距離帯に対人関係者をただちに対応させようとするものである。被調査者は、四つの距離帯を共通の分類枠として、それぞれに該当すると思われる対人関係者を分類し序列化する。この方法で得られた対人関係者の序列は、四つの距離帯の枠組について共通の了解を得がたいため

に、相互に比較することができなかった。共通の了解を得がたい理由は、第一に、ホールの距離帯は「かくれた次元」と呼ばれる如く、普通我々に自覚されていないこと、第二に先に述べた如く、それは平面空間に於ける心的距離をあらわすもので、日常生活に於てそのような空間を見出すことは困難なことである。このテストの結果、調査票の分類枠としてこれを用いることは不適當であることが判明した。

このプリテストは、このような欠陥をもつにもかかわらず、一つの事実を明らかにした。それは、我々が何らの分類枠なしに、しかもたやすくその所有する対人関係者を親疎の序列に配列することができること云う事実である。我々は現実生活に於て、同一人物に対して状況に規定されつつ、さまざまな距離を使い分けている。しかも、その状況を離れた主観的世界に於ては、その人格全体に対して一定の心的距離を保存しており、A よりも B、B よりも C と云う風にお互いを相対的な規準としながら、親疎の序列に配列することができることである。

このようにして分類基準なしに配列される対人関係の序列は、次のような操作を加えれば、ホールが現実の平面空間で測定した八つの距離相の距離感が、そのまま主観的世界に保存されたとする場合と一致する可能性が生ずる。それは先ず各人が所有する対人関係者のうち、最も親密な人は密接距離近接相に、最も疎遠な人は公衆距離遠方相に位置するのが最適であると仮定する。これらの人を親疎の両極として、その間に大量の対人関係者を配列し、同等の距離感の者を集めて距離感の層を形成する。そして順次距離感の幅を広げて八段階の層に整理統合すれば、それらは大体に於てであるが、ホールの距離相に対応する距離感の序列に近づいてくると思われる。ただしこの仮定は、同一文化圏に属し、基本的に性質の異なる社会関係を経験し、そこで通用する距離感を身につけた人々に対して適用される必要がある。したがって、これは子供や精神障害者にはあてはまらない。この調査では、基本的社会関係を、「根源共同社会関係、精神共同社会関係、利益共同社会関係²²⁾」として、後の資料分析の枠組とした。

このような考えに基づいて、調査票(I)は対人関係者の序列を分類枠なしに配列し、結果としてホールの距離相と一致させる方法によって、作成されたものである。表1は調査票(I)が作成されたときの例である。その方法と手順は次のとおりである。先ず縦5mm、横3cmのラベルを250枚程用意し(このラベルは裏のうす紙をはがせば、直ちに貼付けることができる)、これに現在その関係が持続している対人関係者を、想い出す順に通し番号を打ち、名前を鉛筆で記入していく。名前の部分は、調査票の作成後に消すことになるから、記入者にわかりさえすれば略号でもよい。ここで関係の持続している人とは、シュッツの云う「回復可能なわれわれ関係」にある人を意味するから、死亡した人や、対面関係の経験が全くないペンフレンドやスターなどは入らない。しかし、名前は知らないが挨拶しあう食堂のおばさんや、顔見知りのタバコ屋のおじさんは書き入れねばならない。この調査票の作成上、特に大切なことは、最も疎遠な人の限界まで書き出すことであり、この課題が達成された時には、一人の学生の対人関

対人関係と視界に関する事例研究（Ⅰ）

表一 調査票（Ⅰ）：あなたが言葉を交わす人々を、すべてラベルに書き出して、
近く感じる人から遠く感じる人へ左から右へ並べて下さい。

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
2 (C)	1 (A)	5 (F)	10 (H)	11 (I)	13 (N)	15 (O)	16 (P)
	3 (B)	4 (D)	7 (G)	8 (J)	14 (K)		
		6 (E)		9 (L)			
				12 (M)			
			17 (S)	18 (R)	22 (V)	19 (U)	
				21 (Q)		20 (T)	

係者の総数は200名から250名の範囲になることがわかった。次にラベルを自分との親密さの程度にならべる手順であるが、まず机の上にラベルをばらまいて、なんとなく同じ程度の親密さを感じるラベル同志をくっつけて、十数段階の序列をつくり、順次その親密さの幅をひろげて八段階の序列に整理する。さらに、この八段階の縦の序列をくずさずに、同じ意味連関で結ばれているラベルを横にグループ化する。このグループの中には、例えば入院中に知り合った医者や患者がいっしょに含まれたりする。このようなグループ化を行なう理由は、後述する方法によって、グループ内の序列を動かさずにグループ全体の位置を修正するためである。以上の手順に従ってラベルが、縦横に配列されたならば、それを表1の如く貼付け、グループを線で囲む。調査票(Ⅰ)は、固定した分類枠に面識者を配当する方法ではなく、手順に従って台紙に貼付けられるまで、自由にラベルの位置を修正しつつ体験世界に於ける心的距離を試行錯誤的に空間化する方法を考案した所に特徴がある。

調査票(Ⅱ)は、調査の第一段階でホールの距離帯に対人関係者を対応させることができたのちに、第二段階としてそれらの人々に対する言語行動を、その距離帯に対応させるためのものである。この調査では、昭和50年に呼び名の使い分けについて、昭和52年に訴えかけの云いまわしの使い分けについてアプローチした。表2は調査票(Ⅱ)の記入例である。

その番号と名前は調査票(Ⅰ)で用いたものを、番号順に記入していく。名前の部分はすべての調査票が記入された後に切り取る。ここでは対面的状況に於て使用される対人関係用語を、日本文法に従って、相手を指す用語を対称詞、自分を指す用語を自称詞、第三者を指す用語を他称詞に区別して、前二者について、「私が相手に対する場合」と「相手が私に対する場合」を並記するようにした。その記入上の注意は、対面的状況に於て、かつて用いたことのあるす

表－2 調査票 (Ⅱ)：あなたが言葉を交わすときの呼び名を記入して下さい。

なまえ	番号	性別 (M・f)	年齢 (才)	あいだ がら	持続 期間 (年)	対 称 詞		自 称 詞	
						私が相手に対す るときの対称詞	相手が私に対す るときの対称詞	相手に対す るときの私の 自称詞	私に対するときの 相手の自称詞
(A)	1	M	50	父	20	おやじ, お父さん	△△,	ボク	サケル
(C)	2	f	47	母	20	お母ちゃん	△△, △ちゃん, お兄ちゃん	ボク, オレ	わたし
(B)	3	f	18	妹	18	△△, ブッチー	お兄ちゃん	オレ	あたし, ブッチー
(D)	4	M	23	兄	20	あにき	△△, おまえ	オレ	オレ
(F)	5	f	75	祖母	20	あばあちゃん	△△ちゃん	ボク, オレ	わて

すべての呼び名を、語形変化に留意して具体的に記入することである。ただし姓は「〇〇」、名は「△△」でおきかえ、呼び名を用いたことがない場合には「ナシ」、呼ばないようにする場合には「サケル」と記入することにした。これらの呼び名の分類表は後の考察の際に掲げた(表－14, 15)。例えば、姓名に関する対称詞の表現型を抽象化すると、姓+敬称(さん、くん)、名+敬称(さん、くん)或いは愛称(ちゃん、ぼう等)となり、いずれも敬称や愛称を省略したり、変形したりする。これらの語形変化が、親疎の距離感と上下の距離感の変化に応じてかなり明白に、使い分けられていることが後の分析で明らかになった。

間柄の欄には、抽象的表現(知人など)や主観的表現(恋人など)を避けて、できる限り事実的な関係を記入する(例えば O 高校の先生、P 高校のクラスメイト、Q 君の彼女、大学のクラブの先輩、飲み屋で知りあった人など)。この間柄を次のように分類して、それらを集団類型に所属させ、集団類型ごとに集計するのに役立てた。A) 血縁関係、B) 地縁関係、C) 同窓の友人関係、D) 大学の友人関係、E) 先生、F) 学外の友人、G) アルバイトの関係、H) サービスを受ける関係である。E(先生)には、稽古ごとなどの先生をも含めたが、医者、看護婦、家庭教師などは H(サービスの関係)に入れた。F(学外の友人)に F-2 を設けて、知人の知人と云う関接的意味を含む形式のもののすべてを(母の友人、父の会社の部下、田舎の叔母の家のとなりの人、友人の妹など)これに含めた。更にこれらの関係類型を次の集団類型に属するものとして対応させた。すなわち AB は根源共同社会、CDEF は精神共同社会、GH は利益共同社会とした。これらの集団類型は、結合意味に志向する意識の共同性による分類であり、その分類視角が、調査対象者の立場から間柄を記述する仕方と同様であるために、円滑に対応させることができた。後の分析で、呼び名と云いまわしの使い分けがこれらの類型に応じて、かなり明確に行われていることが示される。

調査票(Ⅲ)と(Ⅳ)は、ホールの八つの距離相に該当すると思われる諸行為類型を試作し、それをアンケート項目としたものである。前者は対人関係者に対して取られるコミュニケーションの諸形態について、後者は14項目の類形的行為について調査したものである。その目的は、これらの指標に対する該当項目の分布と調査票(Ⅰ)に於て指標なしに配列された位置とを比較して社会類型ごとにズレのモデルを構成し、そのモデルを“ものさし”にして、調査票(Ⅰ)の配列の妥当性を検討し、モデルに適合しない場合には、ラベルのグループ全体の位置を操作的に修正することである。この修正法は後述することにして、まず調査票(Ⅲ)と(Ⅳ)の指標の妥当性を検討しなければならない。

調査票(Ⅲ)の指標とその記入例は、表3に示されている。調査票の左に上下の格づけの指標があるが、これは四つの距離帯とともに、後の分析の基本的枠組とされるものである。すなわち横軸に四つの距離帯を取り、縦軸に五つの格づけのランクを取って、合計20コマの空間にすべての対人関係者を配当しようとする企てである。この上下の格づけは、あくまでも人格全体に対する主観的な上下の距離感を意味するものであって、客観的な個々の指標にとらわれなくともよい。同格を、やや上(+), 等しい(0), やや下(-)に分けて、上下の格づけを五段階にした理由は、それが我々の上下の距離感の体験形態に应ずるものと考えたからである。もし上下の間に「等しい」だけを置くとしたら、上には上があり、下には下があると云う距離感の様相を捉えることができないであろう。この五段階の枠組を後の分析に用いたところ、親疎の距離感に影響されて「やや上」「やや下」が、「上位」あるいは「下位」として扱われる場合と「等しい」として扱われる場合のあることがわかった。そこでこの格づけの欄には、明らかに「上」あるいは「下」とみなしている者に対して「上位」「下位」を適用し、判断に迷う者に

表一3 調査票(Ⅲ): 言葉を交わす人に対する上下の格づけと対話の仕方について該当する欄に○印をつけて下さい。

番 号	格　　づ　　け					対　　話　　の　　形　　式							
	上 位	同　　格		下 位		沈黙の対話		相互発想の対話		質問応答の対話		儀礼の対話	
		やや上 (+)	等しい (○)			やや下 (-)	気分の 伝染	しぐさ の了解	相　談	雑　談	談　話	用　談	面　談
1	○						△		○	△			
2	○					○	△	△	△				
3					○		○		△				
4		○						○	△	△			
5	○					△	△		○				

対して「同格」の三つの枠組を適用することにした。

調査票の右にある「対話の形式」の諸類型は、筆者がホールの四つの距離帯（八つの距離相）に該当すると思われるものを、多くのコミュニケーションの諸形態の中から選び、あるいは考案して形式としたものである。コミュニケーションの諸形態には、(Ⅰ) 会話、談話、対談、討議、講義、報告、講演、演説、審査、審問、インタビュー、協議、交渉など、(Ⅱ) 告白、思索的な対話、相談、雑談、物語りなどがある。前者は疎遠な距離感を、後者は親密な距離感を内含していると思われる。これらの距離感を更に吟味してホールの距離相に配当するには、かなりの無理があった。その上、これらを指標とするには、それぞれについて共通の理解が得られねばならないが、日常言語の常として、その意味内容は定義されていない。まして筆者の考案になる「沈黙の対話」や「儀礼の対話」などに、共通の理解を得ることは困難である。

これらの制約がある中で、なおかつ指標として用いるために、それぞれについてのコミュニケーション体験を漠然とではあれ指し示し得る程度の平易な説明を加えることにした。その説明は次の通りである。

(A) 沈黙の対話；これは言葉をあまり使わなくても話しが通ずる話しぶりです。言葉がとぎれても、面と向わないで他の用事をしながらでも、寝そべっていても黙っていても、その場がシラケる不安を感じさせないものです。ここでは多くの言葉はかえってくどく、わずらわしく感じられます。この形式は、いわゆるツーカーの、じっくり気の合った間柄でなければあまり用いることができません。

(A-1) 気分の伝染——相手の雰囲気やその気分を感じとり、自分もそれに感染してしまう。(A-2) しぐさの了解——相手特有のしぐさや身ぶりや大体の意味するところがわかる。

(B) 相互発想の対話；これは気が許せる相手と互いに興味ある話題を出しあって、自由に発想をくり広げるものです。

(B-1) 相談——どうすればよいか迷うときに意見を述べあったり、行動の指針をさぐりあうものです。(B-2) 雑談——いろんな話題を出しあって、気軽に話しあうものです。

(C) 質問応答の対話；何かの問題について質問しあうことで対話をつないでいくものです。

(C-1) 談話——一定の内容を発音や云いまわしに注意して伝達しあうものです。(C-2) 用談——用向きの話しあいです。

(D) 儀礼の対話；ほかの対話の糸口になるようなきまりきった言葉の交わりあいです。

(D-1) 面談——きまりきった事柄を儀礼的に尋ねあうものです（どちらへおでかけですか。ちょっとそこまで）。(D-2) 面交——身ぶり（会釈、目礼など）や挨拶（ヤーヤーなど）で知りあいであることを示しあう程度の対話です。

これらの説明のあいまいさは、記入方式を次のようにすることで補った。それは一つの指標を選ぶのではなく、その人と対話するときに取られたことのあるすべての形式に対して△印を付け、その中からその人と対話するのに最もふさわしいと思う話しぶりを一つ選んで○印で表わすと云う方法である。そしてこの○印の位置が、その人に対する規範化したコミュニケーションの距離感を表わすものとした。

対人関係と視界に関する事例研究（Ⅰ）

表一 4 調査票（Ⅳ） それぞれの人についてあてはまる次の項目のすべてに
○印をつけて下さい。

行為 番号 ／ 類型	(1) (略)	(2) (略)	(3) (略)	(4) (略)	(5) (略)	(6) (略)	(7) (略)	(8) (略)	(9) (略)	(10) (略)	(11) (略)	(12) (略)	(13) (略)	(14) (略)
1	○					○		○			○			○
2	○					○		○			○			○
3	○				○	○		○	○		○			○
4		○				○		○	○		○			○
5	○					○		○			○			○

調査票(Ⅳ)は、ホールの八つの距離相に14項目の行為類型を配当して、それらをランダムに配列し、それぞれの対人関係者に対してかつて行ったことのある項目のすべてに○印を付けるものである。表一 4 はその記入例である。筆者が調査に先き立って試作した段階では、各距離相に二項目づつ（ただし公衆距離のみ一項目づつ）配当したが、プリテストを重ねた結果、次のような対応関係を見出した。

(A) 密接距離<近接相>——11) 自然にからだに触れることができる。14) 身のまわりの人々の出来事について話す。<遠方相>——1) 身のまわりの用事を頼んだり頼まれたりする。6) 近年同じ屋根の下に寝とまりしたことがある。8) 近年食後の団らんを共にしたことがある。

(B) 個体距離<近接相>——2) プライバシー、秘密をうちあげたり、うちあげられたり、アドバイスを求めたり求められたりする。9) 相談にのったり、のってもらったりする。<遠方相>——5) 近年誘ったり、誘われたりして余暇を共に過ごしたことがある。

(C) 社会距離<近接相>——10) 出会うとき、別れる時にいねいな挨拶をする。13) 標準語のていねいな言葉で話そうとする。<遠方相>——7) 立居振舞に注意して話す。3) 必要な用件以外は話さないのが普通である。

(D) 公衆距離<近接相>——12) 出会った時、ふたことみこと言葉を交わして別れるのが普通である。<遠方相>——4) 出会った時、会釈目礼だけで通りすぎるのが普通である。

プリテストは、学生10名（男女各5名）について行われ、その結果は表一 5、表一 6 に示されている。表一 5 は、調査票(Ⅰ)に於て指標なしに配列した位置を、そのままホールの距離相と一致するものと仮定して、それぞれの距離相に該当する人々の総数に対する、各項目に付けられた○印の件数の割合をパーセンテージで表わしたものである。表一 6 は、調査票(Ⅲ)に於て○印が付けられた対話の形式の位置を、その人の該当する距離相と仮定して、同様に各距離相の人数に対する各項目の○印件数の割合をパーセンテージで表わしたものである。例えば、100%の項目は、その距離相に 配当された人々のすべてに対して取られる行為類型であること

表－５ 調査票（Ⅰ）の距離相に対する諸行為類型の割合

（単位：％）

諸行為類型 の配列 票（Ⅰ）の 距離相	密 接 距 離					個 体 距 離			社 会 距 離				公衆距離	
	近 接 相		遠 方 相			近 接 相		遠方相	近 接 相		遠 方 相		近接相	遠方相
	(11)	(14)	(1)	(6)	(8)	(2)	(9)	(5)	(10)	(13)	(3)	(7)	(12)	(4)
密接距離＜近接相＞	81	83	96	42	100	48	79	46	0	0	4	2	6	0
＜遠方相＞	49	73	56	49	73	42	69	57	16	9	5	5	23	0
個体距離＜近接相＞	25	79	38	23	65	24	46	41	19	10	4	10	21	3
＜遠方相＞	16	69	29	15	41	9	26	37	30	28	10	16	34	9
社会距離＜近接相＞	14	63	19	6	23	9	18	25	26	19	14	15	41	8
＜遠方相＞	12	65	14	2	24	5	14	21	57	44	61	40	85	26
公衆距離＜近接相＞	2	19	19	2	8	1	3	5	25	27	43	19	63	35
＜遠方相＞	0	8	2	0	1	0	0	1	13	15	37	15	20	55

表－６ 調査票（Ⅲ）の距離相に対する諸行為類型の割合

（単位：％）

諸行為類型 の配列 票（Ⅲ）の 距離相	密 接 距 離					個 体 距 離			社 会 距 離				公衆距離	
	近 接 相		遠 方 相			近 接 相		遠方相	近 接 相		遠 方 相		近接相	遠方相
	(11)	(14)	(1)	(6)	(8)	(2)	(9)	(5)	(10)	(13)	(3)	(7)	(12)	(4)
密接距離＜近接相＞	86	93	96	32	96	50	71	57	0	0	4	7	11	0
＜遠方相＞	67	85	69	40	83	60	85	58	0	0	4	0	2	0
個体距離＜近接相＞	18	81	33	22	57	46	91	45	40	21	0	16	22	0
＜遠方相＞	24	76	33	15	41	13	26	35	9	6	9	4	42	1
社会距離＜近接相＞	3	37	27	6	17	3	9	24	48	44	21	35	43	11
＜遠方相＞	4	35	14	2	14	0	6	7	34	26	47	24	54	19
公衆距離＜近接相＞	1	11	5	0	8	1	2	2	20	20	32	17	52	38
＜遠方相＞	0	4	1	0	0	0	0	0	19	22	45	23	19	66

を示す。これらの表に於て黒枠で囲んだ数値はこの調査で採用した配列を決める手がかりとしたものである。

これらの表の数値はまた、一つの項目を一つの距離相に配当することが困難であることをも示している。これらの14項目の行為類型に対する距離感が人によってどのように違うかをみるために、14項目を親疎の序列に配当するプリテストを数十名の人々に実施した。その結果、人によって配列順序にかなりの相違がみられ、ここで採用した序列が常に妥当するものではないことが示された。配列順序は、年齢、生活環境、パーソナリティなどの相違によって、異なっ

てくるものと考えられるが、人間類型と対応した配列の型を類型化するには至らなかった。各距離相に対応する行為類型を発見することは、社会化の研究にとって重要な課題であると考えられる。

7

以上で調査票の検討を終えることにして、次にズレ関係のモデルをつくる方法に移る。既に述べた如く、この調査の当面の目的は対人関係者を媒介項として、ホールの距離帯と人間の諸行動に表現される距離感とを対応させることにある。そのためには、八つの距離相のいずれかに対人関係者を位置づける必要がある。今、対人関係者は、三種類の調査票に異なる位置あるいは範囲を占めて現われてきた。すなわち調査票(Ⅰ)に於て指標なしの位置が、(Ⅲ)に於て対話の行われる範囲(△印)と最もふさわしい対話の位置(○印)が、(Ⅳ)に於て行為類型の集中する範囲が示されている。しかしそれらはかならずしも一致するわけではない。現実の対人関係に於ては、様々の距離が使い分けられるのであるから、それが一致しないのは当然である。むしろズレの幅を持っているがために、現実の状況変化に即応することができるとも云えるのである。しかしここでは先に挙げた理由で、三つの位置あるいは範囲のズレを調整して、操作的に対人関係者に一定の位置を与えなければならない。

ズレ関係調整の方法は、典型的な被調査者の作成した資料を選んで、三者のズレを関係類型ごとに集計し、類型に一般的なズレ具合を設定し、これをモデルとして他の資料のズレ具合の当否を判定するものである。モデルに適合しない場合には、ラベルのグループ内の距離関係は変更しないで、グループ全体の位置を動かして適合させるという方法である。

このような操作を行うために、調査票(Ⅰ)に於て、同じ意味連関をもつラベルをグループ化して、グループ毎にその位置を修正できるようにしておいた。各グループの内部の序列は、現実のかかわりの中で生ずる距離感を保存するもので、かなり信頼できるが、グループ間の位置関係は主観的世界に於て構成されたものであるから、それに多少の操作を加えても、主観的世界の現実を歪めるものではないと考えられる。そこでこのようなモデルを“ものさし”として、グループ間の配置を一律に修正し、資料分析の結果を一般化し得るものにしようと考えたわけである。

ズレ関係モデルを構成する方法は次の通りである。先ず十分に検討して作成された調査票6部(男女各3名)を選び出し、調査票(Ⅱ)に記述された間柄を、既に述べた関係類型(血縁、地縁などA～H)に分類する。そして調査票(Ⅲ)の用紙を利用して、その類型ごとに番号を記入し、その番号に対応する調査票(Ⅰ)、(Ⅲ)、(Ⅳ)の位置をそのまま八つの枠組の上に写し取る。これで関係類型ごとに三者のズレが一枚の表の上に表わされることになる。次にその表のそれぞれの対話の形式の位置(○印)を原点にして、他の二者とのズレを集計していく(八つ

表一 7 関係類型別のズレ形態モデル

(単位: %)

票(Ⅰ), (Ⅳ) の位置		票(Ⅲ)の位置 (0点)	-4	-3	-2	-1	0	1	2	3	4
A. 血 縁 関 係	(Ⅰ) の 位 置	(Ⅳ) の 位 置	2	6	18	33	32	5	2	2	0
	(Ⅰ) の 位 置	(Ⅳ) の 位 置	4	16	25	15	20	11	6	2	0
B. 地 縁 関 係	(Ⅰ) の 位 置	(Ⅳ) の 位 置	0	0	3	13	58	18	5	3	0
	(Ⅰ) の 位 置	(Ⅳ) の 位 置	1	19	3	4	50	12	4	6	0
C. 同 窓 関 係	(Ⅰ) の 位 置	(Ⅳ) の 位 置	1	3	4	22	38	19	11	2	1
	(Ⅰ) の 位 置	(Ⅳ) の 位 置	10	17	19	15	17	8	7	5	1
D. 大学の友人関係	(Ⅰ) の 位 置	(Ⅳ) の 位 置	0	5	7	32	41	24	7	3	0
	(Ⅰ) の 位 置	(Ⅳ) の 位 置	4	15	18	15	16	11	8	10	3
E. 師 弟 関 係	(Ⅰ) の 位 置	(Ⅳ) の 位 置	0	0	5	27	31	20	13	1	3
	(Ⅰ) の 位 置	(Ⅳ) の 位 置	2	5	17	18	23	12	15	7	1
F. 学外の友人関係	(Ⅰ) の 位 置	(Ⅳ) の 位 置	0	1	4	12	25	37	7	13	0
	(Ⅰ) の 位 置	(Ⅳ) の 位 置	6	11	18	12	23	14	11	10	2
G. アルバイト関係	(Ⅰ) の 位 置	(Ⅳ) の 位 置	0	0	0	2	29	40	22	7	0
	(Ⅰ) の 位 置	(Ⅳ) の 位 置	6	13	11	22	21	10	8	10	0

の枠組のそれぞれを一目盛とする)。表一 7 は、左にズレる場合をマイナス、右をプラスとして、ズレを関係類型ごとに集計し、その分布を総数 100 としてパーセンテージで示したものである。(数値が 0 の欄に近く集中している場合には、三者のズレが少ないことを意味している)。この表は関係類型によって、三者のズレ具合が一樣でないことを物語っている。

A) 血縁関係に於ては、(Ⅲ)の対話の形式の位置(0点)に対して(Ⅰ)の指標なしの位置、(Ⅳ)の行動類型の位置がともに左へズレる傾向を強く示している。このことは血縁関係の序列が、対話の形式にかかわりなく、根源共同の意識と呼ばれるべき強い結合感に基づいて配列されることを物語っている。従ってこのモデルで位置を修正するときには、(Ⅰ)の序列が尊重されねばならない。B) 地縁関係、E) 師弟関係は、(Ⅰ)(Ⅳ)の位置がともに正規分布する。C) 同窓関係、D) 大学の友人関係については、(Ⅰ)の位置は正規分布するが、(Ⅳ)の位置は左へフラットなズレを示し、友人関係に於ては、対話の位置よりも左に属する親密な諸行為類型がまんべんなく行われることを推測させる。F) 学外の友人関係、G) アルバイト関係は、(Ⅰ)の位置が右にズレ、(Ⅳ)の位置が左にズレる傾向を示す。このことは対話の形式や行為類型が社交的なものであっても、その人に対する心的距離は、それよりも遠く感ぜられることを意味すると思われる。

このようにして構成されたズレの分布モデルを“ものさし”にして、調査票の配列を検討するわけである。その手順は、ズレの分布モデルを作成する手順と同様である。各調査票のズレ分布集計表をモデルの夫れと比較して、修正すべきか否かを検討し、修正する場合には、調査

票(Ⅰ)のラベルのグループ全体の位置を変更する。

以上述べてきたズレ関係調整法は、三種類の位置関係を案配して適当と思われる位置を判定すると云う方法を取らざるを得ない。それはいつれの種類の位置も一義的に位置決定する指標とならないからである。視界の中の一定の位置を対人関係者に与えることは、飽くまでも操作的に行われることであって、むしろズレの形態を取る方が現実の姿に近いことは云うまでもない。

8

次にこの調査の目的達成のための第二段階に入る。それは各距離帯に配当された対人関係者に対する対人的諸行動を捉えて、これに表現される距離感をホールの距離帯と対応させ、距離感に基づいて対人的行動を体系化しようとする試みである。今回の報告は、対人的諸行動の中から対人関係用語の使い分けの問題を取りあげ、次回は訴えかけの云いまわしの使い分けの問題を論ずる予定である。

ここで調査結果の報告に入る前に、対人関係用語の研究がもつ社会学的意味を明らかにしておかねばならない。言葉と社会が相互規定関係にあることは云うまでもないが、対人関係に於て対人関係用語（自称詞、対称詞）が使い分けられる事実は特に重要な意味をもつ。それは自他の位置を言語的に規定し、対人関係をそこに定位する働きをする。自称詞の使い分けは言語的自己規定、対称詞の夫れは言語的対象規定と呼ばれ、これが相互に確認され合わなければ、それに応じて使い分けられる言葉づかいや敬語、立居振舞の様式などの選択が困難になる。このように対人関係用語の使い分けが対人関係の様態を規定する反面、それはそれが属する社会の特徴を反映する文化体系の一つの型を示している。これは対人関係用語の使い分けが文化圏によって異なることを意味する。

鈴木孝夫氏は「ことばと社会」に於て、ヨーロッパ語による自己規定が絶対的であるのに対して、日本語による場合は相対的であることを指摘している。²³⁾前者は、話者の言語的自己規定が相手の存在と無関係に、自発的独立的になされるのに対して、後者は言語的対象規定が自己規定に先行することを意味する。ヨーロッパ語の人称代名詞は、一人称が話す能動的主体であること、二人称が聴く受動的主体であることを意味する対話関係の形式であるために、相手が存在しなくても自己規定が可能である。しかし、日本語に於ては、人称代名詞だけでなく、対人関係用語一般が現実的な人間的属性、たとえば身分のちがい、年令の差、力の相違などと結びついているために、その使い分けが必要となる。そして相手の属性に従って言語的に対象を規定しないかぎり言語的自己規定ができない仕組みになるのである。

彼は日本語の対人関係用語の用法の原型を家族内の用法に求め、次の五原則に整理している。²⁴⁾後の資料分析の参考のために引用しておく。

- (一) 話者（自己）は分割線の上に位する親族を、人称代名詞を使って直接呼ぶことはできない。
- (二) 話者は分割線上より上の人を通例親族名称で呼ぶ。しかし分割線より下の者を親族名称で呼びかけることはできない。
- (三) 話者は分割線より上の者を名前だけで直接呼ぶことはできない。分割線より下に位する者は、名前で呼ぶことができる。
- (四) 話者、殊に若い女性は分割線より上の者と話をするとき、自分を名前で称することが可能であるが、下位の者に対するときはできない。
- (五) 話者は分割線より下にある相手と話す時に自分を相手からみた親族名称で云うことが出来るが、分割線より上の者に対してはそれができない。

以上が、「家族（親族）内の自称詞と対称詞の規則」と呼ばれるものである。ここで云われる分割線とは、家族の系譜の上に占める話者（自己）の位置を原点として、目上と目下を分ける斜線を意味する。その線を境界にして、兄姉父母おばおじなどが目上に、弟妹、自己の妻娘、甥姪などが目下に配分される。日本人の対人関係の状況は家族内と家族外の二種に大別でき、後者の規則は前者に対応するとして同様に五つの規則を挙げているが、ここでは省略する。

これらの諸規則は次の資料分析に於ても確かめ得る所であった。ここで両研究的方法的な相違点を明らかにしておく必要がある。これらの諸規則は上下の対立概念を分析枠として析出されたものであるために、同等者間の使い分けの規則がない。目上、目下の概念は、「自己より上の世代に属するものは目上であり、自己と同じ世代の者との間では、年令の上下が目上目下を決定する²⁵⁾」と規定され、同等者は上下の平面の接線（分割線）で表わされる。その結果、幅も広がりもない線上に自己に対する同等者は存在し得ないことになる。

既述の如く、我々は上下の関係を距離感の実際に即して五段階に分け、後述の如く、同格の「やや上」と「やや下」が三つの「関係の意識」と親疎の距離感に影響されて、上位下位にいたり同格に含まれたりすることを示し得た。更に親族名称や姓名に敬称や愛称を付加して語形を使い分けることが、距離感の相違に基づいてなされることを示した。この研究成果の相違は使い分けの規則に対するアプローチの仕方が異なる所に基づく。前者は云わばカタスコピッシュ像を構成する一般化的方法に基づいて客観的な社会規範の抽出に重点が置かれている。それに対して、後者はアナスコピッシュ像を構成する個性化的方法に基づいて、主観的世界に於けるその使い分けの形態を捉えようとしているのである。そして我々の研究は、単に使い分けの規則や形態それ自体の把握を目的とするのではなく、更にそれを手がかりとして客観的現実と主観的現実の相互連関する形姿を捉えること、そしてそれを以てカリキュラムの構成に役立てることを意図するものである。

対人関係と視界に関する事例研究（Ⅰ）

るものである。調査対象者は追手門学院大学一、二回生30名（男女各15名）、実施期間は昭和50年10月である。この調査票の記述内容は、学生30名とその対人関係者5609名の間に交わされる対称詞（私が相手を指す場合6380件、相手が私を指す場合6227件）と自称詞（私が相手に対する場合6139件、相手が私に対する場合5941件）であった。その基本的な分析枠は、ホールの距離帯を横軸に4コマ、上下の格づけを縦軸に5コマ取って平面上に20コマの枠組みを構成したものである（表－8）。もう一つの分析枠として、三つの社会関係の種類（根源、精神、利益共同社会関係）を用いた。表－8はこれらの枠組に、第一段階の操作手順に従って対人関係者5609名を配当したものである。

対称詞、自称詞の分析手順は次の通りである。先ず各人の対人関係者を間柄の記述に基づいて、A 血縁関係、B 地縁関係、C 同窓関係、D 大学の友人関係、E 師弟関係、F 学校以外の友人関係、G アルバイト関係、H サービスを受ける関係に分類し、更にABを根源共同社会関係、CDEFを精神共同社会関係、GHを利益共同社会関係に下属させる。次にこの三種の社

表－8 基本的枠組みと配当人数表 (単位：人)

			密 接 距 離	個 体 距 離	社 会 距 離	公 衆 距 離	合 計
上 位		根 源	150	180	133	154	617
		精 神	29	124	281	234	668
		利 益	7	35	56	88	186
		(計)	186	339	470	476	1,471
同 							

会関係類型ごとに分類された人々を、先に挙げた20コマの基本的枠組に配当する。この枠組に配当された人々に対する対称詞、自称詞がその枠組の距離感を表わすものとして、それらの枠組ごとに対称詞、自称詞を分類し集計する。対称詞、自称詞の分類表の説明は、それぞれの分析の際に行う。

このような手順に従うと被調査者各人について三種の社会関係類型ごとの対称詞、自称詞の集計表が得られる。この個人の六種類の集計表を種類別に集計すると全体の表ができる。これら六種類の表を対称詞、自称詞ごとに集計すると全体について二種類の全数表が実数で示される。これらの集計表の各欄の左側の数字は、被調査者（私）が使い分ける場合、右側の数字は対人関係者の夫れを意味する。この実数表では、各枠組に配当される人数の多少に応じて対称詞、自称詞の使い分け件数が増減するために、件数の多い少ないを以って使い分けの割合を測ることはできない。そこで各枠組を単位として、そこに配当された人々に対して使い分けられるそれぞれの対称詞、自称詞の割合を％で示し、枠組相互間の使い分けの割合を比較することにした。表一8は上記の実数表を％表に変えるために必要な各枠組の人数表である。このようにして作成された％表（1％未満四捨五入）の中から、対称詞と自称詞の総件数％表のみを次に掲げた（表一9、表一11）。これらの表は表一8の基本的枠組の縦の欄を横に組みかえて集計したものであるから「縦軸集計表」と名づける。

これらの％表に基づいて対人関係用語の使い分けの問題を考察する前に、これらの％表を操作して作成できる若干の表を掲載しておく。表一10と表一12は表一8の基本的枠組の横の欄に沿って集計したものであり、「横軸集計表」と名づける。第一の表（表一9、11）は上下の距離感の変化をパーセンテージであらわしているのに対して、第二の表（表一10、12）は親疎の距離感の変化をパーセンテージで示している。鈴木氏が対人関係用語の使い分けを上下関係のみで考察したのに対し、これらの表は上下感による使い分けと親疎感による使い分けの両方を表わすことができる。

図一1（対称詞の「図」と「地」）は表一9に於て1％未満の領域を「地」とし、係数のある領域を「図」として記号化したものである。×印は1コマの左右に係数がある場合で、対称詞が交換的に用いられることを意味し、□印はいずれか一方に係数がある場合で非交換的に用いられることを意味する。地は○印で埋められた領域であり、対人関係用語を使わない、あるいは使えない領域を意味する。地の領域は、図と図の間の距離感のへだたりを表示する意味に於て重要である。（「自称詞の図と地」はここに掲載しないが、その考察は、図一4「自称詞の形態化事例」を利用して行なう。）

図一2（愛称と敬称の使い分け）は姓名に関する対称詞の語形の相違が、図と地の形態にどのように表わされるかを示したものである。

以上、三種類の分析図表すなわち、Ⅰ）基本的枠組縦軸集計表（表一9、11）、Ⅱ）基本的枠

対人関係と視界に関する事例研究（Ⅰ）

表一 9 対 称 詞 の

距離 対称詞	密 接 距 離						個 体 距 離					
	上位	同 格			下位	(計)	上位	格 同			下位	(計)
		+	0	-				+	0	-		
A ₁ 続柄のみ	10, 0	5, 2		0, 7		5, 1	0, 0					0, 0
A ₂ ～ちゃん	46, 1	23, 0	4, 1	0, 13	0, 30	26, 3	19, 0	4, 0	0, 0	0, 1	2, 29	5, 1
A ₃ ～さん	18, 0	2, 0		0, 7		8, 0	10, 1	5, 0	0, 0		0, 2	3, 0
A ₄ 変 形	4, 0	1, 0	2, 0	0, 7		2, 0	1, 0					0, 0
B ₁ 名 の み	1, 35	6, 27	11, 7	67, 0	52, 0	10, 22	0, 5	2, 2	7, 4	12, 1	12, 2	6, 4
B ₂ ～ちゃん	6, 30	5, 19	11, 6	27, 40	13, 22	8, 21	4, 24	10, 22	5, 4	8, 8	26, 26	7, 12
B ₃ ～さん	1, 5	6, 5	1, 1			2, 4	3, 6	6, 5	1, 0	3, 1	2, 0	2, 2
B ₄ ～くん	1, 1	2, 0	0, 2			1, 1	0, 2	0, 1	1, 0	4, 0	14, 0	1, 1
B ₅ 変形(愛称)	4, 29	18, 18	20, 24	7, 13	26, 17	13, 24	5, 21	7, 23	17, 20	15, 13	43, 2	14, 20
C ₁ 姓 の み	2, 5	0, 8	32, 35	13, 7		10, 14	1, 19	5, 22	46, 50	28, 14	2, 5	26, 34
C ₂ ～さん	6, 4	14, 9	15, 14	7, 13	0, 9	10, 8	14, 8	39, 11	19, 15	15, 32	2, 2	19, 14
C ₃ ～君	0, 6	6, 4	7, 7	0, 7	9, 0	4, 6	1, 10	4, 16	16, 16	13, 10	2, 0	10, 13
C ₄ 変 形		2, 2	11, 11			3, 4	1, 0	2, 2	6, 6	3, 1		4, 3
D ₁ 役職名のみ	2, 0					1, 0	2, 0	2, 0	0, 0			1, 0
D ₂ ～さん							0, 0	1, 0				0, 0
E ₁ 先 生	6, 0	1, 0				3, 0	19, 0	2, 1			0, 3	4, 0
E ₂ 先 輩	2, 0			0, 7		1, 0	6, 0	4, 0	0, 1	1, 16		2, 2
F ₁ (一般名)	2, 0			0, 7		1, 0	6, 0	2, 1	0, 0	0, 2		2, 0
F ₂ ～ちゃん	3, 0	3, 0			0, 13	2, 1	5, 0	13, 1	0, 0	0, 5	0, 9	3, 1
F ₃ 変 形	1, 1	0, 1				0, 0	0, 0	2, 0				0, 0
G ₁ アダ名	0, 4	2, 5	17, 16		4, 0	5, 7	1, 4	2, 2	11, 11	3, 3	0, 2	6, 7
G ₂ 芸 名	1, 0					0, 0		2, 0	0, 0	1, 0		0, 0
H ₁ あなた				0, 7		0, 0		0, 1	0, 1	0, 1		0, 1
H ₂ あんた			0, 1			0, 0		0, 4	0, 0		2, 0	0, 1
H ₃ おまえ	1, 3	1, 2	11, 4	7, 0		4, 3	0, 2	2, 1	10, 8	3, 2		6, 5
H ₄ き み		1, 1	0, 1			0, 0	0, 1	1, 2	0, 0			0, 1
I ₁ サケル	2, 1	1, 1	2, 2			2, 1	2, 2	2, 1	0, 0		0, 2	1, 1
I ₂ ナ シ	1, 1	1, 0	0, 1			0, 0	4, 3	5, 3	3, 3	3, 6	2, 2	3, 3
J そ の 他	1, 0	1, 1	7, 2			2, 1	1, 2	1, 0	7, 6	1, 2	2, 0	4, 3

各欄の左の数字は、被調査者が呼びかける側、右の数字は対面関係者が呼びかける側を表わす

縦 軸 集 計 表

(単位: %)

社 会 距 離						公 衆 距 離						(合計)
上位	同 格			下位	(計)	上位	同 格			下位	(計)	
	+	0	－				+	0	－			
2, 0	0, 0	0, 0	0, 1	0, 7	1, 0	2, 0	1, 0			0, 11	1, 0	0, 0
5, 0	4, 1	0, 0			2, 0	4, 0	1, 0	0, 0			2, 0	4, 1
1, 0	2, 0				0, 0							2, 0
												0, 0
1, 1	2, 6	4, 4	7, 1	5, 3	3, 4	0, 0	0, 1	1, 1	1, 4	7, 0	1, 1	4, 4
1, 13	3, 11	3, 2	7, 1	10, 10	3, 6	1, 8	3, 8	5, 3	1, 4	5, 2	3, 5	5, 9
2, 6	4, 4	1, 0	1, 1	2, 0	1, 2	1, 4	3, 6	0, 0	1, 2		1, 3	2, 2
1, 2	0, 2	1, 0	0, 1	2, 0	1, 1	0, 1	0, 1		1, 0	5, 0	0, 0	1, 1
2, 10	5, 9	10, 10	11, 7	25, 8	8, 10	1, 10	4, 6	3, 5	11, 3	15, 0	4, 6	9, 13
0, 28	3, 24	33, 39	23, 16	2, 5	19, 32	0, 19	5, 28	27, 39	16, 23	8, 7	13, 28	19, 30
22, 21	37, 12	15, 13	17, 42	0, 12	20, 17	12, 13	14, 11	11, 11	8, 16	2, 10	11, 12	16, 14
1, 9	3, 12	15, 10	17, 1	14, 0	10, 9	0, 6	3, 7	19, 14	25, 2	10, 7	10, 9	10, 10
3, 1	2, 2	7, 6	5, 2	0, 2	5, 4		0, 1	1, 1	3, 3		1, 1	3, 3
1, 0	1, 0	0, 0			0, 0	1, 0					0, 0	0, 0
0, 0	0, 0		0, 2		0, 0	0, 0					0, 0	0, 0
39, 0	8, 0				10, 0	25, 0	10, 0	0, 0	1, 2	0, 2	10, 0	8, 0
5, 0	5, 1	1, 1	1, 15	0, 3	2, 2	0, 0	9, 0	0, 0	0, 4	0, 2	2, 0	2, 1
4, 0	7, 0	0, 0	1, 1	0, 7	2, 0	8, 0	6, 0	0, 0	0, 1		3, 0	2, 0
8, 1	4, 1	0, 0	0, 3	0, 8	3, 1	6, 2	9, 3	0, 0	0, 2	0, 16	4, 2	3, 1
0, 0	3, 1	0, 0	1, 0		1, 0		0, 0		1, 0		0, 0	0, 0
1, 7	4, 6	4, 9	4, 3	3, 2	3, 8	0, 0	1, 0	2, 3	1, 1	0, 2	1, 1	4, 5
1, 0		0, 0			0, 0			0, 0			0, 0	0, 0
0, 1	0, 1	0, 1			0, 1		0, 0		1, 0		0, 0	0, 1
	0, 1	0, 0	1, 0	2, 0	0, 0	0, 0	0, 0	0, 0	6, 4	0, 2	0, 1	0, 0
0, 1	1, 4	14, 9	11, 3		8, 6	0, 0	1, 1	7, 3	6, 1	3, 2	3, 1	6, 4
0, 3	0, 2	0, 0		2, 0	0, 1	0, 2	0, 1	0, 0		2, 0	0, 1	0, 1
5, 4	5, 2	2, 1	5, 7	2, 2	4, 2	7, 5	11, 2	7, 3	4, 3	10, 7	8, 4	4, 2
7, 7	14, 14	3, 5	5, 6	5, 5	6, 7	13, 11	13, 16	7, 7	9, 11	21, 21	10, 11	6, 7
0, 1	3, 2	6, 1	1, 1	2, 0	4, 1	0, 0	2, 2	2, 1	2, 1	2, 0	2, 1	3, 2

表—10 対 称 詞 の

対 称 詞 組	上 位				同			
					+			
	密 接	個 体	社 会	公 衆	密 接	個 体	社 会	公 衆
A ₁ (続 柄 の み)	10, 0				5, 2			
A ₂ (～ ち ゃ ん)	46, 1	19, 0	2, 0	2, 0	23, 0	4, 0		1, 0
A ₃ (～ さ ん)	18, 0	10, 1	5, 0	4, 0	2, 0	5, 0	4, 1	1, 0
A ₄ (変 形)	4, 0	1, 0	1, 0		1, 0		2, 0	
B ₁ (名 の み)	1, 35	0, 5	1, 1		6, 27	2, 2	2, 6	0, 1
B ₂ (～ ち ゃ ん)	6, 30	4, 24	1, 13	1, 8	5, 19	10, 22	3, 11	3, 8
B ₃ (～ さ ん)	1, 5	3, 6	2, 6	1, 4	6, 5	6, 5	4, 4	3, 6
B ₄ (～ く ん)	1, 1	0, 2	1, 2	0, 1	2, 0	0, 1	0, 2	0, 1
B ₅ (変 形)	4, 29	5, 21	2, 10	1, 10	18, 18	7, 23	5, 9	4, 6
C ₁ (姓 の み)	2, 5	1, 19	0, 28	0, 19	0, 8	5, 22	3, 24	5, 28
C ₂ (～ さ ん)	6, 4	14, 8	22, 21	12, 13	14, 9	39, 11	37, 12	14, 11
C ₃ (～ く ん)	0, 6	1, 10	1, 9	0, 6	6, 4	4, 16	3, 12	3, 7
C ₄ (変 形)		1, 0	3, 1		2, 2	2, 2	2, 2	0, 1
D ₁ (役 職 名)	2, 0	2, 0	1, 0	1, 0		2, 0	1, 0	
D ₂ (～ さ ん)						1, 0		
E ₁ (先 生)	6, 0	19, 0	39, 0	25, 0	1, 0	2, 1	8, 0	10, 0
E ₂ (先 輩)	2, 0	6, 0	5, 0			4, 0	5, 1	9, 0
F ₁ (一般名～さん)	2, 0	6, 0	4, 0	8, 0		2, 1	7, 0	6, 0
F ₂ (～ ち ゃ ん)	3, 0	5, 0	8, 1	6, 2	3, 0	13, 1	4, 1	9, 3
F ₃ (変 形)	1, 1				0, 1	2, 0	3, 1	
G ₁ (あ だ 名)	0, 4	1, 4	1, 7		2, 5	2, 2	4, 6	1, 0
G ₂ (芸 名)	1, 0		1, 0			2, 0		
H ₁ (あ な た)			0, 1			0, 1	0, 1	
H ₂ (あ ん た)						0, 4	0, 1	
H ₃ (お ま え)	1, 3	0, 2	0, 1		1, 2	2, 1	1, 4	1, 1
H ₄ (き み)		0, 1	0, 3	0, 2	1, 1	1, 2	0, 2	0, 1
I ₁ (サ ケ ル)	2, 1	2, 2	5, 4	7, 5	1, 1	2, 1	5, 2	11, 2
I ₂ (ナ シ)	1, 1	4, 3	7, 7	13, 11		5, 3	14, 14	13, 16

横 軸 集 計 表

(単位: %)

格								下 位			
0				一							
密 接	個 体	社 会	公 衆	密 接	個 体	社 会	公 衆	密 接	個 体	社 会	公 衆
4, 1				0, 7 0,13 0, 7 0, 7	0, 1	0, 1		0,30	2,29 0, 2	0, 7	0,11
2, 0											
11, 7	7, 4	4, 4	1, 1	67, 0	12, 1	7, 1	1, 4	52, 0	12, 2	5, 3	7, 0
11, 6	5, 4	3, 2	5, 3	27,40	8, 8	7, 1	1, 4	13,22	26,26	10,10	5, 2
1, 1	1, 0	1, 0			3, 1	1, 1	1, 2		2, 0	2, 0	
0, 2	1, 0	1, 0			4, 0	0, 1	1, 0		14, 0	2, 0	5, 0
20,24	17,20	10,10	3, 5	7,13	15,13	11, 7	11. 3	26,17	43,21	25, 8	15, 0
32,35	46,50	33,39	27,39	13, 7	28,14	23,16	16,23		2, 5	2, 5	8, 7
15,14	19,15	15,13	11,11	7,13	15,32	17,42	8,16	0, 9	2, 2	0,12	2,10
7, 7	16,16	15,10	19,14	0, 7	13,10	17, 1	25, 2	9, 0	2, 0	14, 0	10, 7
11,11	6, 6	7, 6	1, 1		3, 1	5, 2	3, 3			0, 2	
						0, 2					
	0, 1	1, 1		0, 7	1,16	1,15	1, 2 0, 4		0, 3	0, 3	0, 2 0, 2
				0, 7	0, 2 0, 5 1, 0	1, 1 0, 3 1, 0	0, 1 0, 2 1, 0	0,13	0, 9	0, 7 0, 8	0,16
17,16	11,11	4, 9	2, 3		3, 3 1, 0	4, 3	1, 1	4, 0	0, 2	3, 2	0, 2
0, 1	0, 1	0, 1		0, 7	0, 1	1, 0	1, 0		2, 0	2, 0	0, 2
11, 4	10, 8	14, 9	7, 3	7, 0	3, 2	11, 3	6, 1				3, 2
0, 1										2, 0	2, 0
2, 2		2, 1	7, 3			5, 7	4, 3		0, 2	2, 2	10, 7
0, 1	3, 3	3, 5	7, 7		3, 6	5, 6	9,11		2, 2	5, 5	21,21

距離 対称詞	密接距離			個体距離			社会距離			公衆距離		
	上位	同位	下位	上位	同位	下位	上位	同位	下位	上位	同位	下位
A ₁ 総柄のみ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
A ₂ ～ちゃん	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
A ₃ ～さん	0	0	0	0	0	0	0	×	0	0	0	0
A ₄ 変形	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
B ₁ 名のみ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
B ₂ ～ちゃん	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
B ₃ ～さん	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
B ₄ ～くん	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
B ₅ 変形	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
C ₁ 姓のみ	0	×	×	×	×	×	0	×	×	×	×	×
C ₂ ～さん	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
C ₃ ～君	0	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
C ₄ 変形	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
D ₁ 役職名のみ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
D ₂ ～さん	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
E ₁ 先生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
E ₂ 先輩	0	0	0	0	0	×	0	×	×	0	0	×
F ₁ (一般名) ～さん	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
F ₂ ～ちゃん	0	0	0	0	0	0	×	×	×	×	×	×
F ₃ 変形	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
G ₁ アダ名	0	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
G ₂ 芸名	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
H ₁ あなた	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
H ₂ あなた	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
H ₃ おまえ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
H ₄ きみ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
I ₁ サケル	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
I ₂ ナシ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
J その他	0	×	×	×	×	×	0	0	0	0	0	0

図—1 対称詞の図と地

距離 対称詞	寄 接 距 離			個 体 距 離			社 会 距 離			公 衆 距 離		
	上段	中	下段	上段	中	下段	上段	中	下段	上段	中	下段
B ₁ (～<A) 根源	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
精確	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
利益	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(合計)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
B ₂ (～<A) 根源	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
精確	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
利益	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(合計)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
B ₃ (～<A) 根源	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
精確	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
利益	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(合計)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
B ₄ (～<A) 根源	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
精確	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
利益	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(合計)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
B ₅ (～<A) 根源	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
精確	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
利益	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(合計)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C ₁ (～<A) 根源	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
精確	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
利益	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(合計)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C ₂ (～<A) 根源	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
精確	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
利益	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(合計)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C ₃ (～<A) 根源	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
精確	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
利益	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(合計)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C ₄ (～<A) 根源	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
精確	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
利益	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(合計)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C ₅ (～<A) 根源	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
精確	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
利益	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(合計)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

図-2 愛称・敬称の使い分け

表一11 自 称 詞 の

距離 自称詞	密 接 距 離						個 体 距 離					
	上位	同 格			下位	(計)	上位	同 格			下位	(計)
		+	0	-				+	0	-		
a ₁ 続柄のみ	2, 2					1, 1						
a ₂ 〜ちゃん	1, 18	0, 13	0, 2	13, 0	13, 4	1, 11	0, 9	0, 3			16, 2	1, 2
a ₃ 〜さん	1, 4	0, 1				0, 2	0, 2	0, 1				0, 1
a ₄ 変 形	0, 2		0, 1			0, 1	0, 4				0, 2	0, 1
b ₁ 名 の み	1, 0	4, 5	1, 2		0, 13	1, 2	1, 0		0, 2	0, 1	0, 12	0, 2
b ₂ 〜ちゃん	0, 3	0, 3		0, 20	30, 4	2, 3	0, 0	0, 1	0, 0		16, 3	7, 0
b ₃ 変 形	0, 1	0, 1	1, 2	0, 7	4, 17	0, 2	1, 0		0, 0	1, 1	0, 7	0, 1
c ₁ 資 格 名	0, 2					0, 1	0, 3		0, 0	1, 1	2, 2	0, 1
c ₂ 一 般 名	0, 1	0, 1				0, 1	0, 2	6, 2			5, 0	1, 1
d ₁ ボ ク	44, 17	30, 16	33, 24	67, 47	17, 39	37, 21	44, 28	45, 20	49, 28	53, 47	26, 45	47, 29
d ₂ わ た し	43, 31	41, 56	53, 52	40, 27	13, 13	44, 41	42, 30	37, 39	40, 45	38, 37	36, 31	40, 40
d ₃ わ た く し		1, 0				0, 0			0, 0	1, 1		0, 0
d ₄ あ た し	8, 0	12, 7	20, 7			11, 4	3, 1	3, 3	4, 2	0, 3	5, 0	3, 2
d ₅ あ た く し							0, 0					0, 0
d ₆ オ レ	3, 10	26, 30	15, 28	20, 27	9, 0	12, 20	4, 12	10, 30	28, 2	15, 16	7, 10	18, 30
d ₇ う ち	6, 1	15, 1	11, 2		4, 0	9, 1	3, 2	12, 5	3, 2	3, 3	0, 2	4, 2
d ₈ わ て し							0, 1	0, 3	0, 0			0, 1
d ₉ わ し	3, 13	2, 4	5, 2	7, 0	0, 4	3, 7	0, 11	3, 10	3, 3	3, 1		2, 5
d ₁₀ わ い							0, 1		0, 0	0, 1	0, 2	0, 0
d ₁₁ 自 分	1, 0	1, 0				0, 0			0, 0			0, 0
d ₁₂ そ の 他	0, 1	2, 0	2, 2			1, 1	1, 0	1, 0	0, 0			0, 0
e ₁ サ ケ ル	0, 2		1, 1			0, 1	1, 0	0, 1				0, 0
e ₂ ナ シ	1, 3				4, 4	0, 1	2, 5	1, 1	0, 0	1, 3	2, 3	1, 2
f そ の 他	1, 0		1, 2			1, 0	2, 0	1, 1	5, 1	1, 2		3, 1

組横軸集計表 (表一10, 12), III) 図と地の形態図 (図一1, 図一4) が得られた。これらを用いて, 次に対称詞と自称詞の使い分けの分析を行う。

10

対称詞と自称詞の分類表は, 各集計表の左欄に掲載してある。A は親族名称である。A₁ は「続柄」のみ (パパ, おやじ), A₂ は「〜ちゃん」 (お父ちゃん), A₃ は「〜さん」 (お父さん), A₄ はそれらの変形したもの (おやっさん) を表わす。図一1 (対称詞の図と地) を横の欄に沿ってみると, 親族名称のすべてに共通する性格が見出せる。それは同格 (0) の欄が地となって左右に非交換性 (non-reciprocal) を示す□印が縦に連なる形状を示すことである。そ

縦 軸 集 計 表

(単位: %)

社 会 距 離						公 衆 距 離						合 計
上位	同 格			下位	(計)	上位	同 格			下位	(計)	
	+	0	－				+	0	－			
0, 0					0, 0	0, 0					0, 0	0, 0
0, 2	0, 1			5, 0	0, 0	0, 2		0, 0		2, 0	0, 1	0, 2
0, 2	1, 1				0, 1	0, 0	0, 0				0, 0	0, 1
0, 0					0, 0							0, 0
1, 0		1, 0	0, 2		1, 0	0, 0	1, 0	0, 0	0, 1	0, 5	0, 0	0, 1
			1, 1	0, 2	0, 0							0, 0
0, 0		0, 0		0, 3	0, 0			0, 0			0, 0	0, 0
0, 5	0, 1				0, 1	3, 5					1, 1	0, 1
0, 2	0, 3			3, 0	0, 1	0, 5	0, 3	0, 0	1, 0	3, 0	0, 2	0, 1
32,26	37,24	22,17	25,31	19,25	27,21	19,23	20,19	21,13	26,17	21,36	21,19	31,23
55,38	42,38	37,40	41,36	22,32	42,39	47,26	44,28	25,30	24,39	23,16	35,29	39,36
0, 2			0, 2		0, 1	0, 0	0, 1				0, 0	0, 0
2, 2	7, 3	4, 1	10, 5	3, 2	4, 2	4, 0	3, 1	5, 4	16, 4	5, 0	5, 2	5, 2
0, 0					0, 0	0, 1	0, 0				0, 0	0, 0
4,17	14,27	31,29	38,40	24, 5	23,26	5, 7	8,16	34,36	31,15	10, 7	19,21	20,25
2, 3	6, 2	2, 1	5, 0	3, 7	3, 2	0, 0	4, 4	4, 2	5, 9	2, 0	3, 2	4, 2
		0, 0			0, 0	0, 0	0, 1				0, 0	0, 0
0, 7	3, 7	2, 2	5, 3	3, 0	2, 4	0, 3	2, 3	1, 1	1, 2	0, 2	1, 2	2, 4
0, 2		0, 0			0, 1	0, 0					0, 0	0, 0
	0, 0				0, 0							0, 0
0, 1		0, 0			0, 0	0, 0		0, 0			0, 0	0, 0
	1, 0	0, 0	0, 1	3, 0	0, 0	0, 1	3, 1	0, 0	1, 0	2, 0	1, 1	0, 0
6, 7	4, 5	2, 2	1, 1	5, 7	3, 4	11,15	9,15	5, 4	7, 6	21,18	8,11	4, 5
7, 0	3, 2	2, 0			3, 1	2, 0		0, 0			1, 0	2, 0

して(0)より左側の□印は、各欄の左側に位置して、それが自己の上位者に対する呼びかけ語であることを、右側の□印は各欄の右側に位置して下位者の自己に対する呼びかけ語であることを意味する。この場合自己は上位者に対しては、親族名称を使用し得る能動的主体となるが、下位者に対しては使用し得ない受動的主体である。

更にこの図を縦の欄に沿って、各欄に於ける上位者が下位者に使用し得る対称詞を探すと、B名前、G あだ名、H 代名詞に限定されていることがわかる。(Cの姓も上位者にとって使用可能であるが、親族関係に於ては意味をなさないので除く)。従って図-1は、下位者と上位者が、非相称的 (asymmetrical) な対をなす呼びかけ語を使い分ける仕組みになっていることを示している。この図はまた、先に引用掲載しておいた鈴木氏の「家族(親族)間の自称詞と対称

表—12 自称詞の

自 称 詞	梓 組	上 位				同			
						+			
		密 接	個 体	社 会	公 衆	密 接	個 体	社 会	公 衆
a ₁ (続柄のみ)		2, 2							
a ₂ (～ちゃん)		1, 18	0, 9	0, 2	0, 2	0, 13	0, 3	0, 1	
a ₃ (～さん)		1, 4	0, 2	0, 2		0, 1	0, 1	1, 1	
a ₄ (変形)		0, 2	0, 4						
b ₁ (名のみ)		1, 0	1, 0	1, 0		4, 5			1, 0
b ₂ (～ちゃん)		0, 3				0, 3	0, 1		
b ₃ (変形)		0, 1	1, 0			0, 1			
c ₁ (資格)		0, 2	0, 3	0, 5	3, 5			0, 1	
c ₂ (一般名)		0, 1	0, 2	0, 2	0, 5	0, 1	6, 2	0, 3	0, 3
d ₁ (ボク)		44, 17	44, 18	32, 26	19, 23	30, 16	45, 20	37, 24	20, 19
d ₂ (わたし)		43, 31	42, 30	55, 38	47, 26	41, 56	37, 39	42, 38	44, 28
d ₃ (わたくし)				0, 2		1, 0			0, 1
d ₄ (あたし)		8, 0	3, 1	2, 2	4, 0	12, 7	3, 3	7, 3	3, 1
d ₅ (あたたくし)					0, 1				
d ₆ (オレ)		3, 10	4, 12	4, 17	5, 7	26, 30	10, 30	14, 27	8, 16
d ₇ (うち)		6, 1	3, 2	2, 3		15, 1	12, 5	6, 2	4, 4
d ₈ (わて)			0, 1				0, 3		0, 1
d ₉ (わし)		3, 13	0, 11	0, 7	0, 3	2, 4	3, 10	3, 7	2, 3
d ₁₀ (わい)			0, 1	0, 2					
d ₁₁ (自分)		1, 0				1, 0			
e ₁ (サケル)		0, 2	1, 0		0, 1		0, 1	1, 0	3, 1
e ₂ (ナシ)		1, 3	2, 5	6, 7	11, 15		1, 1	4, 5	9, 15

詞の規則」のうち、対称詞に関する規則（１～３）がすべてあてはまることを物語るものでもある。同位者相互の対称詞は、鈴木氏の規則にないが、この図によって名前と代名詞が使用されることがわかる。これらの対称詞は、上位者の下位者に対する対称詞と種類としては同じであるが、後述の如く愛称と敬称の使い分けによって、両者の距離感の相違が調節されることがわかる。

次に表—９（対称詞の縦軸集計表）と表—10（対称詞の横軸集計表）によって、親族名称の表わす上下感と親疎感の変化を数値の高低で捉えてみる。A₂「～ちゃん」は、上下の距離感の大きい場合に用いられる傾向を示し（上位と下位の数値）、A₃「～さん」はそれが小さい場合（上位と同格＋）に用いられる傾向を示す。親疎感の数値は、A₁が社会距離に於て急激に減少するのに対して、A₃は疎遠の方向に漸減してゆく。従ってA₁は上下感が大きい故に親密な領域で用いられ、A₂は上下感が小さい故に疎遠な領域にまで広がると云える。

横 軸 集 計 表

(単位: %)

格								下位			
0				一							
密接	個体	社会	公衆	密接	個体	社会	公衆	密接	個体	社会	公衆
0, 2				13, 0				13, 4	16, 2	5, 0	2, 0
0, 1									0, 2		
1, 2	0, 2	1, 0			0, 1	0, 2	0, 1	0,13	0,12		0, 5
1, 2				0,20		1, 1		30, 4	16, 3	0, 2	
				0, 7	1, 1			4,17	0, 7	0, 3	
					1, 1				2, 2		
							1, 0		5, 0	3, 0	3, 0
33,24	49,28	22,17	21,13	67,47	53,47	25,31	26,17	17,39	26,45	19,25	21,36
53,52	40,45	37,40	24,30	40,27	38,37	41,36	24,39	13,13	36,31	22,32	23,16
					1, 1	0, 2					
20, 7	4, 2	4, 1	5, 4		0, 3	10, 5	16, 4		5, 0	3, 2	5, 0
15,28	28,42	31,29	34,36	20,27	15,16	38,40	31,15	9, 0	7,10	24, 5	10, 7
11, 2	3, 2	2, 1	4, 2		3, 3	5, 0	5, 9	4, 0	0, 2	3, 7	2, 0
5, 2	3, 3	2, 2	1, 1	7, 0	3, 1	5, 3	1, 2	0, 4		3, 0	0, 2
					0, 1				0, 2		
1, 1						0, 1	1, 0			3, 0	2, 0
		2, 2	5, 4		1, 3	1, 1	7, 6	4, 4	2, 3	5, 7	21,18

B は対称詞としての名前を表わす。B₁ は「名前」のみ、B₂ は「～ちゃん」、B₃ は「～さん」、B₄ は「～くん」、B₅ は「ちゃん」以外の愛称（ター坊、アコタン）、ならびに省略形（ミッチャン）を意味する。図一 2（愛称・敬称の使い分け）は、B₄→B₁→B₃→B₂→B₅ の順に上下の距離感がうすれて交換的な語形になることを、図と地の形態によって配列したものである。表一 9（対称詞の縦軸集計表）によると、B₁ を例外として除けば、この順位に対応して、上下感が少なくなるほど高いパーセンテージで表われることがわかる。図と地の形態では第 2 位の上下感を伴うと思われた B₁ のパーセンテージが、意外に高い数値を示す理由は、名前の呼び捨てが親族名称と非相称的な対をなすためであると考えられる。表一 10（対称詞の横軸集計表）によれば、B₁ と B₅ が高い数値を保ちつつ漸減し、公衆距離にまで至っている。以上のことから推測すれば、名前を対称詞として使用する関係の原型は、親族体系に於ける上位者の下位者に対する関係に帰せられると思う。それは本来、上下関係に於て使用されるが、その上下感を

表-13 対 称 詞 の 形

距 離	密 接 距 離						個 体 距 離					
	上位	同 格			下位	(計)	上位	同 格			下位	(計)
		+	0	-				+	0	-		
1 %図のコマ数	20,12	17,13	12,14	6,12	5, 5	60,56	16,12	21,17	11,11	13,15	10,10	71,65
5 %図のコマ数	6, 6	8, 7	9, 8	6,12	4, 4	33,37	8, 7	8, 6	9, 7	7, 7	4, 5	36,32
5 %図に分布するケース (件数)												
(M) A (長男)	1, 2		3, 1		2, 1	6, 4	1, 2	2, 1	6, 3			9, 6
B (末)	1, 1	1, 2	3, 1	1, 1		6, 5	4, 4	3, 2	5, 3	1, 2	2, 1	15,12
C (一人)	1, 1	3, 0	3, 1			7, 2		6, 4	6, 4	2, 4		14,12
(f) D (長女)	3, 3	3, 2			2, 2	8, 7	7, 5	2, 1	5, 2	3, 3	1, 1	18,12
E (末)	2, 2	3, 1				5, 3	6, 3		7, 2			13, 5
F (一人)	2, 1	2, 1				4, 2	2, 3	3, 2	3, 2	2, 1		10, 8
5 %地に分布するケース (件数)												
(M) A							1, 0	1, 0				2, 0
B		3, 1	0, 1			3, 2	1, 2	1, 4		2, 0	1, 3	5, 9
C	0, 1	2, 1	0, 2			2, 4		7, 6	0, 3	3, 1		10,10
(f) D	1, 0					1, 0		2, 0	0, 2			2, 2
E	1, 0					1, 0	4, 1		2, 1			6, 2
F									2, 3			2, 3

柔らげるために強い結合感で結ばれた間柄に於て使用される傾向が強い。そして名前が疎遠な領域で使用される場合には、それに愛称を加えあるいは変形して上下感を柔らげようとする。従って B₂ (愛称) と B₅ (変形) は、上下感を縮めて親密感を押し広げる働きをすると云える。

C は対称詞としての姓を表わす。C₁ は「姓」のみ、C₂ は「～さん」、C₃ は「～くん」、C₄ は変形 (山本さん→ヤマサン) を意味する。図-2 は、姓に関する図と地の形態が、C₃→C₁→C₄→C₂ の順序で上下感を減少させることを図示したものである。即ち、C₃ と C₁ は、上位者の下位者に対する呼びかけ語の傾向を強く帯びている。C₄ は下位者からの呼びかけ語の傾向を示す。C₂ は相互交換的に用いられる。表-9 (対称詞の縦軸集計表) の姓に関する数値は、名の場合と違って、上下感の減少にともなって増大していない。これらの数値の特徴はいずれも同格 (0) を中心にして山型の分布を示していることである。表-10 (対称詞の横軸集計表) によって親疎感の数値の変化をみるといづれも個体、社会距離に於て高くなっている。C₃ と C₁ は、上位と (+) の欄では右側の数値が高くなり、(-) と下位の欄では左側が高くなっている。これと反対に、C₂ は、上位と (+) に於ては左側の数値が、(-) と下位に於ては右側の数値が高くなっている。このことは姓が上下関係に於て使用されるときには、上位者は C₃ と C₁ を、下位者は C₂ を使用する傾向が強いことを意味する。

態 化 事 例 比 較 表

社 会 距 離						公 衆 距 離						(合計)
上位	同 格			下位	(計)	上位	同 格			下位	(計)	
	+	0	－				+	0	－			
18,14 4, 7	18,17 5, 7	12,11 8, 9	13,16 8, 5	10,11 4, 7	71,69 29,35	10, 9 4, 5	15,12 6, 6	9, 9 5, 4	15,15 6, 2	9,11 6, 5	58,56 27,22	260,246 125,126
3, 1	1, 2	8, 4	3, 1		15, 8	3, 4	2, 2	3, 2	2, 1	1, 1	11,10	41,28
2, 3	2, 4	4, 4	5, 3	3, 2	16,16	2, 4	0, 1	2, 1	3, 1	1, 0	8, 7	45,40
1, 0	5, 4	8, 5	5, 3		19,12	1, 1	4, 3	4, 2	3, 2	3, 2	15,10	55,36
1, 2	1, 3	3, 3	4, 3	2, 2	11,13	3, 3	1, 3	1, 1	2, 1	2, 1	9, 9	46,41
4, 5	2, 3	7, 5	4, 1	1, 2	18,16	4, 3	1, 1	1, 1	1, 0		7, 5	43,29
1, 1	3, 1	4, 2	2, 1		10, 5		4, 1	1, 1			5, 2	29,17
	1, 0	1, 0			2, 0	1, 1		3, 1	1, 1		5, 3	9, 3
3, 5	2, 4	1, 2	0, 2	3, 2	9,15	2, 4	0, 1	0, 1	0, 1		2, 7	19,33
	6, 5	2, 4	2, 3		10,12	0, 1	2, 3	2, 1	2, 3	1, 1	7, 9	29,35
2, 0	2, 0	2, 1	0, 1	2, 1	8, 3	3, 1	1, 0		1, 0	3, 2	8, 3	19, 8
5, 2	2, 0	3, 0		1, 1	11, 3	1, 1		1, 0			2, 1	20, 6
	1, 2	1, 1			2, 3			5, 3			5, 3	9, 9

更に上位者が C_2 を使用する場合には、 C_2 の上位、(+), (-) の欄に於て、個体距離よりも社会距離の方が高くなり、 C_3 を使用する場合には逆に個体距離の方が高くなっている。このことから、上位者が C_2 を使うときには疎遠で対等であることを、 C_3 を使うときには親密で対等でないことを表現していると云える。併し姓は本来、中間の親密感（個体・社会距離）に基礎づけられた対等関係に於て使用されるのが常態である。 C_3 （～くん）と C_2 （～さん）は、姓を対称詞として用いることに伴う対等感（親密感）を抑制する働きをする語形であると云える。

D は役職名（課長さん）、E は資格（先生、先輩）、F は親族用語が他人に使用される場合（他所のおじさん）、を意味する。これらの対称詞の図と地の形態を、図-1の横の欄に沿ってみる。すると同格（0）の欄を境いにして、左右の側で呼びかけの主体の位置が入れかわり、親族名称の形態と類似していることがわかる。これは専ら下位者の上位者に対する対称詞であることを意味する。

代名詞の図と地の形態をみると、いずれも非交換的で上下感を伴う傾向を示している。「おまえ」は、同格（+, 0, -）に於て交換的であるが、表-9をみると同格（+）の左側と（-）の右側の者がこれを使用する数値は極めて低いことを物語っている。表-10をみると、「おま

表-14 自 称 詞 の 形

距 離	密 接 距 離							個 体 距 離						
	上位	同 格			下位	(計)		上位	同 格			下位	(計)	
		+	0	-					+	0	-			
1 %図のコマ数	11,13	9,12	8,10	5, 5	7, 7	40,47		7,13	7,11	6, 7	8,11	8,11	26,53	
5 %図のコマ数	4, 5	5, 6	6, 4	5, 4	5, 4	24,23		2, 5	5, 5	4, 3	3, 3	7, 5	21,21	
5 %図に分布するケース (件数)														
(M) A (長男)	1, 3			1, 1		1, 2	3, 6	1, 2	1, 1	2, 3				4, 6
B (末)	1, 1	2, 2	2, 1	1, 1			6, 5	1, 4	2, 2	1, 2	2, 2	2, 3		8,13
C (一人)	1, 1	2, 3	2, 2				5, 6		2, 4	2, 3	2, 3			6,10
(f) D (長女)	1, 4	1, 2			1, 1	3, 7	1, 2	1, 2	1, 2	1, 2	1, 2	1, 1		5, 9
E (末)	2, 2	1, 2				3, 4	1, 3			1, 3				2, 6
F (一人)	1, 1	1, 2				2, 3	1, 2	1, 3	1, 3	1, 3	1, 2			4,10
5 %地に分布するケース (件数)														
(M) A	1, 0					1, 0				0, 1				0, 1
B	1, 0		0, 2			1, 2	1, 0	0, 1						1, 1
C								0, 1	3, 4	3, 7				6, 7
(f) D	0, 1					0, 1	0, 2							0, 2
E	0, 2	1, 0				1, 2	3, 5		0, 2					3, 7
F	0, 1	0, 1				0, 2	0, 1	0, 2	0, 1					0, 4

え」は同格の親密な領域で、「きみ」は上位下位の疎遠な領域で用いられる傾向のあることを示している。

最後に同格の範囲は、「上下の距離感」と「親疎の距離感」と「関係の意識」の錯綜の度合いによって一定でないことを述べておく。図-2 (愛称、敬称の使い分け) は、三種の関係類型 (根源、精神、利益共同社会関係) ごとに、各対称詞の図と地を比較したものである。この図の領域は、×印と□印によって構成されているが、前者は対称詞が交換的に使用され得る同質的空間を意味し、後者は非交換的に使用される異質的空間を意味する。もし同格の範囲が一定ならば、その範囲内では対称詞が同様に使い分けられるはずである。同格の範囲で同じ使い分けが行われているか否かは、×印と□印の空間配置で確かめることができる。

B₁ (～くん) は、根源共同社会関係、個体距離、同格 (0) に於て交換的であり、それ以外はすべて非交換的である。B₁ (名のみ) は、精神共同社会関係、社会距離、同格 (+) (0) (-) の範囲に於て交換的であり、上位下位に於て非交換的である。B₂ (～ちゃん) は、利益共同社会関係、個体距離、同格 (+) と (0) に於て交換的、上位と (-) に於て非交換的である。

以上若干の事例を挙げるだけでも、同格の範囲の一定でないことは明らかであるが、図-2 を全体として縦の欄に沿ってみれば、同格 (+, 0, -) の範囲は上位下位から区別されて、

態 化 事 例 比 較 表

社 会 距 離						公 衆 距 離						(合計)	
上位	同 格			下位	(計)	上位	同 格			下位	(計)		
	+	0	—				+	0	—				
6,12 2, 5	7,10 5, 4	7, 6 3, 3	7, 8 6, 4	8, 7 4, 4	35,43 20,20	5, 8 3, 5	7, 9 3, 3	6, 6 4, 3	7, 7 5, 4	7, 5 4, 4	32,35 19,19	143,178 85, 83	
1, 1	2, 2	1, 3	2, 3		6, 9	1, 3	2, 2	2, 3	1, 2	1, 1	7,11	20,22	
1, 3	1, 3	2, 3	2, 3		1, 3	7,15	1, 3	1, 2	1, 1	2, 1	1, 1	6, 8	27,41
1, 2	2, 4	2, 3	3, 3		8,12	1, 1	2, 3	2, 3	2, 3	1, 2	8,12	27,40	
1, 4	1, 3	1, 3	1, 3		2, 2	6,15	1, 3	1, 1	1, 1	1, 2	1, 3	5,10	19,41
2, 4	1, 2	1, 3			1, 1	5,10	1, 4	1, 3	1, 1	1, 1		4, 9	14,29
1, 1	1, 1	1, 2	1, 2		4, 6	1, 1	1, 2	1, 2				3, 5	13,24
1, 0		0, 2			1, 2	0, 2	0, 1				0, 3	2, 6	
1, 1	0, 1				1, 0	2, 2	0, 1					0, 1	4, 6
	0, 2	1, 2	0, 1			1, 5		0, 2	0, 3	1, 1	1, 0		
					1, 0	1, 0	0, 1					0, 1	1, 4
2, 2		3, 2	0, 1			5, 5	1, 0	1, 0				2, 0	11,14
	0, 2	0, 1				0, 3		0, 1				0, 1	0,10

同質的空間としてあらわれる傾向が強いと云える。

11

自称詞の考察は、表一11（自称詞の縦軸集計表）、表一12（自称詞の横軸集計表）と図一4（自称詞の形態化事例）を用いて行う。図一4は、図一1（対称詞の図と地）と同じ手続きで作成されたものであるが、地の領域を斜線（1%未満四捨五入）と点粒（5%未満四捨五入）に分けて表示してある。

自称詞aは親族名称、bは名前、cは資格名（先生、先輩）と一般名（親族名称の虚構的使用法）を表わす。これらの自称詞の図と地の形態は、aとcが上位者によって用いられ、bが下位者によって用いられ、いずれも非交換性を示している（図一4）。

このことを、表一11と表一12によって確かめてみる。aは密接・個体距離の上位者によって使用される傾向が強い。a₂（～ちゃん）のみが公衆距離にまで広がる理由は、対称詞と同様に愛称「ちゃん」が、上下の距離感を柔らげて親密感を拡大する働きをするためと思われる。

bは密接・個体距離の下位者によって使用される傾向が強く、b₁（名のみ）→b₃（変形）→b₂（ちゃん）の順に数値が減少する。a₂の「ちゃん」もb₂の「ちゃん」も、共に上下の大きな

距離感を前提にしているが、前者は疎遠な領域にまで広がり、後者は親密な領域に止まる。その理由は次のように考えられる。大人が子供に対して用いる自称詞は、親族名称 (a) からその虚構的使用法 (c) へと拡大する (姪に対する叔父ちゃん→他人の子供に対するおじちゃん)。これに比して子供が大人に対して用いる自称詞は、名前 (b) から代名詞 (d) に移行する。 a_2 が拡大し、 b_2 が縮小する傾向を示す理由は、自称詞のこのような仕組みによると考えられる。

c は社会・公衆距離の上位に於て使用される傾向を示している。

次に代名詞の図と地の形態をみると、 d_1 (ボク) と d_2 (わたし) がすべての領域を通して交換的に用いられることがわかる。 d_6 (オレ) は、上位者に対しては非交換的であるが、それ以外では交換的である。その他の代名詞は何らかの非交換性を示すが、 d_9 (ワシ) はとりわけ上位者の下位者に対するとときに許される自称詞であることをよく示している。

d_1 , d_2 , d_6 の数値は非常に高く、上下親疎の距離感による使い分けを読みとることができない (表一11, 12)。その数値の高い理由は、これら三者以外の自称詞のほとんどが上位者にのみ使用可能な非交換性を示し、彼らに回答し得る自称詞としてはこれら以外にないからである。我は同格 (0) の位置にあって、その使用可能な自称詞は、年少者に対して親族名称を使用するか、その虚構的使用法を用いる以外には、誰れに対しても「ボク」か「わたし」か「オレ」しかない。とりわけ女性の使い分け得る自称詞は、「うち」を使える人を除けば、ほとんどが「わたし」に限定される。そこで自称詞は対称詞に比較して、距離感を表現する手段としては、はるかに貧しいと云える。

12

最後に対称詞と自称詞の「図」と「地」を利用して、社会化の程度の測定の問題にアプローチしてみる。図一3 (対称詞の形態化事例) と図一4 (自称詞の形態化事例) は、二種類の地を斜線 (1%未満四捨五入) と点粒 (5%未満四捨五入) で表わしてある。前者の地に対応する図の範囲は、社会的に使用可能な対称詞・自称詞の最大範囲を示すと云える。個々人はこの範囲内で対称詞・自称詞を使い分け、個性的な図を形態化していると考えられる。地の領域を5%未満とすると社会的に許容される図の領域は、前者の約半分に狭められる。この社会的な図に個人の図を重ねると地の領域にはみ出る場合も現われてくる。対人関係に於て個性的なかわりを持ち、多様な対称詞・自称詞を使い分け得る者ほど社会的な地にはみ出す傾向が強く、類型的にかかわる者ほど社会的な図の中におさまる傾向が強いと考えられる。社会的な地の領域を何%未満とすべきかは、今後の研究に待たねばならないが、そこに現われた図と地の境界線は、社会化と個性化の程度を測定する“ものさし”としての意味をもつと考える。

このような考えに基づいて、図一3は対称詞の社会的な図と地の上に事例として学生 (D) の対称詞の図の位置を記入したものである。○印は根源共同社会関係に於て、△印は精神共同

距離 自稱詞	密接距離			個体距離			社会距離			公衆距離		
	上位	同格	下位 (計)	上位	同格	下位 (計)	上位	同格	下位 (計)	上位	同格	下位 (計)
A ₁ 総柄のみ												
A ₂ ～ちゃん	○		○									
A ₃ ～さん	○											
A ₄ 変形												
B ₁ 名のみ	○		○	○	△	△						
B ₂ ～ちゃん	△	△	△	△	△	△	△	×	×	△		△
B ₃ ～さん												
B ₄ ～くん												
B ₅ 変形	○			○	○	○	○	×	×	×	×	×
C ₁ 姓のみ				△			△	△	△	△	△	△
C ₂ ～さん		△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
C ₃ ～君		△										
C ₄ 変形												
D ₁ 役職名のみ												
D ₂ ～さん												
E ₁ 先生	○			△								
E ₂ 先輩												
F ₁ (一般名) ～さん	○			○	△	△						
F ₂ ～ちゃん												
F ₃ 変形												
G ₁ アダ名												
G ₂ 芸名												
H ₁ あなた												
H ₂ あなた												
H ₃ おまえ												
H ₄ きみ												
I ₁ サケル	△	△					△	△	△	×	×	×
I ₂ ナシ												
J その他												

図-3 対称詞の形態化事例

○印は根源共同社会関係、△印は精神共同社会関係、×印は利益共同社会関係

自称詞	距離			密接距離			個体距離			社会距離			公衆距離		
	上位	中間	下位	上位	中間	下位	上位	中間	下位	上位	中間	下位	上位	中間	下位
a ₁ 続柄のみ															
a ₂ ～ちゃん															
a ₃ ～さん															
a ₄ 変形															
b ₁ 名のみ															
b ₂ ～ちゃん															
b ₃ 変形															
c ₁ (資格名)															
c ₂ (一般名)															
d ₁ ボク															
d ₂ わたし															
d ₃ わたくし															
d ₄ あたし															
d ₅ あたくし															
d ₆ オレ															
d ₇ うち															
d ₈ わて															
d ₉ おし															
d ₁₀ わい															
d ₁₁ 自分															
d ₁₂ その他															
e ₁ サケル															
e ₂ ナシ															
f その他															

○印は根源共同社会関係，△印は精神共同社会関係，×印は利益共同社会関係

図一4 自称詞の形態化事例

社会関係に於て、×印は利益共同社会関係に於て図化したことを意味する。図一4は同様に於て学生(D)の自称詞の図の位置を記入したものである。

この事例をみると、自称詞についてはほとんど社会的な図の範囲におさまっているが、対称詞についてはかなりの件数が地の領域にはみ出していることがわかる。

表一13は対称詞について、表一14は自称詞について、個人の図が社会の図と地にどのように分布したかを集計したものである。各枠組ごとに社会の図のコマ数に対する個人の図の件数の割合を求めれば、それは社会化の度合を意味し、地にはみ出す件数の割合を求めれば、それは個性化の度合を意味すると考える。

ここに掲げた図表は、未だプリテストの段階にあり、結果を云々することはできないが、社会化の度合の測定法として有効ではないかと思う。なぜならば、そこに図として形態化されている領域は、その位置に対応する状況に遭遇したときに、それに見合う行動を取り得る能力を意味しているからである。図として形態化されている領域を越えて、その先に広がる地を形態化する運動こそ、個々の主体のその時点に於ける最大限の営みであると云えよう。

13

この調査報告は、社会化論の再検討から始めて、何が如何に教育さるべきかと云うカリキュラム論に至る掛け橋の意味をもつものである。社会化の概念は、社会と個人の関係を原理的に捉える社会本質論に基礎づけられねばならない。筆者は視界の相互性の概念を根拠にして、バーガーとルックマンによる社会化の構造図式に、ボルノーの「形態化」の概念を加えて、形態化→外化→対象化→内在化の四項図式で社会化の構造を捉えようとした。そしてこの調査を、社会化の形態化過程の研究として位置づけた。

この社会化論の立場からすれば、客観的現実と主観的現実とは、それぞれ個有の構成論理を以て相互に内在しあうものと考えられる。社会の客観的意味体系が内在化されるときには、個人はそれを既に形態化された個有の文脈に沿って受けとめなおす。その外化過程が、他我の外化過程と交叉するときには、共同の意味体系を構成するための交渉過程となる。客観的現実としての社会と主観的現実としての社会は、対面的状況に於て出会う。そこは社会が個々人の行動を最も強く規制する場であり、且つ一般的類型的行動が、個々人の主観的なプロセスによって修正されたり変更されたりする場である。このことは社会化の内在化過程も外化過程も社会的交渉過程であることを意味する。

社会化の過程の主要素は、社会的交渉能力であると云える。社会的交渉能力は、多様な状況を適切に見分けるセンスと状況に見あった行動様式を使いこなす行動能力に基礎づけられる。この調査では、対人関係用語が、1) 親疎の距離感、2) 上下の距離感、3) 社会関係の結合意味に志向する意識（根源、精神、利益共同の意識）を伴って、どのように使い分けられているかをみ

た。そしてこれら三つの基準を、主観的現実としての視界を構成する基本的枠組とした。

対人的交渉過程に於て使い分けられる諸行為が、もし体系化されるならば、それは対人的交渉能力を養うためのカリキュラムにとって基本的資料になる。そこでホールの距離帯の概念を心的距離感の平面空間への投影と解釈して、種々の形態を取る対人的行動をその上に体系化しようと試みたわけである。

教育は、あたかも白紙の上に自由に図を描く如きことを意味するのではなく、既に何らか形態化された個人に手を加えて個人が別の形態に変わる手助けを意味するものとする。その為にはカリキュラムが施行されるにともなって、如何に多様な形態化が人々に生じたかを捉えねばならない。そしてカリキュラムは、その形態化の型に応じて編成しなおされねばならない。カリキュラムの編成は、このようなフィードバックの過程を通して常にあらたに組みなおされる用意がなければならない。

註

- 1) 柴野昌山,『社会化論の再検討——主体性形成過程の考察——』、『社会学評論』27巻3号所収,日本社会学会,1977。
- 2) 柴野,前掲書,p.20。
- 3) 柴野,前掲書,p.30。
- 4) 柴野,前掲書,p.30。
- 5) 柴野,前掲書,p.30。
- 6) 柴野,前掲書,p.31。
- 7) 柴野,前掲書,p.19。
- 8) Th. Litt, Individuum und Gemeinschaft, 3. Aufl. 1926; 蔵内数太,『社会学』,培風館,1962;両著書の「視界の相互性」に関する説明を参照した。
- 9) 拙著,『社会化の屈位と教育における連続・非連続の問題』,追手門学院大学文学部紀要, No. 8, 参照。
- 10) P. L. Berger and Th. Luckmann, The Social Construction of Reality, p. 71—72, Penguin University Books, 1971. (邦訳, 山口節郎訳,『日常世界の構成』,新曜社,1977); externalization, objectivation, internalization の訳は上記邦訳に従った。
- 11) Berger and Luckmann, ibid. p. 79.
- 12) Berger and Luckmann, ibid. p. 78.
- 13) O. F. ボルノー, 浜田正秀訳,『人間学的に見た教育学』,玉川大学出版部,昭和48年, pp. 247—252.
- 14) Th. ガイガー, 大本晋訳,『激情と思慮の間の社会』,新泉社,1973, p. 60.
- 15) G. Simmel, Soziologie, 4. Auf. S. 29.
- 16) Th. ガイガー, 前掲書, pp. 59—95.
- 17) Berger and Luckmann, ibid. Part II, III.
- 18) A. Schütz & T. Luckmann, Translated by R. M. Zaner & H. T. Engelhardt Jr., The Structures of the Life-World, Northwestern Univ. Press, 1973, pp. 36—40, pp. 59—73; 矢谷慈国,『Alfred Schütz の生活世界論の理論的射程』,追手門学院大学創立十周年記念論集,1976, 参照。
- 19) E. J. Hall, The Hidden Dimension, Anchor Books, 1969, Part 10.; 邦訳, 日高敏隆, 佐藤信行訳『かくれた次元』,みすず書房,1970, 参照。

- 20) E. T. Hall, *ibid*, pp. 113—125.
- 21) F. パン, 「日本人の心的距離——その言語表現の仕方について——」, 『言語』 Vol. 4. No. 1. 所収, 大修館, 1975.
- 22) 蔵内数太, 「社会学」, 培風館, 1962, p. 207.
- 23) 鈴木孝夫, 「ことばと社会」, 中央公論社, 1975, pp. 21—26.
- 24) 鈴木, 前掲書, pp. 48—49.
- 25) 鈴木, 前掲書, p. 48.